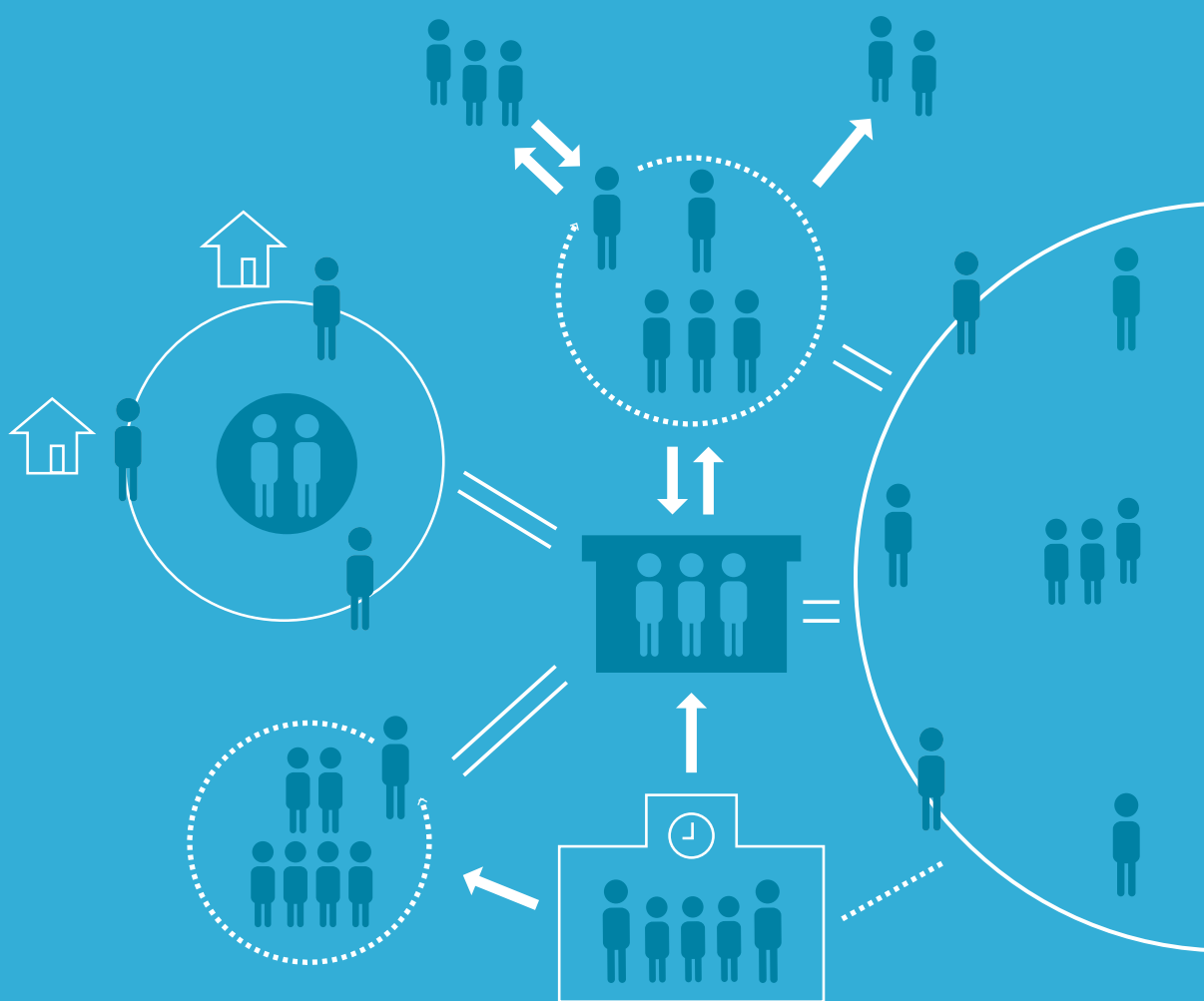


公民館の未来を拓く 地域の創造拠点になるために

「公民館を活用した芸術文化発信事業」調査報告書 2016



目 次

1	はじめに	4
2	公民館のユニークな事業に関する実態調査	6
3	「ユニークな事業」一覧（資料）	26
4	座談会 「公民館のいままでとこれから ～利用者インタビューからみえてきた、公民館のすがた」	40
5	公民館利用者のこえ 那覇市中央公民館「エヴァダンス与儀」 今帰仁村中央公民館「なきじん民踊風車」 北中城村立中央公民館「ストリートダンス WINGS」 浦添市立中央公民館「浦添ゆいゆいキッズシアター」 那覇市小禄南公民館「創作エイサー団体那覇太鼓」	44 49 53 57 63
6	考察 特定非営利活動法人 地域サポートわかさ理事／那覇市若狭公民館館長 宮城潤	68

はじめに

沖縄県には、公立公民館 92 館、類似施設 15 館、自治公民館 963 館（平成 27 年 4 月沖縄県公民館連絡協議会調べ）があります。公民館は「市町村その他一定区域内の住民のために、実際生活に即する教育、学術及び文化に関する各種の事業を行い、もつて住民の教養の向上、健康の増進、情操の純化を図り、生活文化の振興、社会福祉の増進に寄与することを目的」（社会教育法第 20 条）とした社会教育施設として定められています。都市化が進み地域課題が多様化、複雑化する現代社会において、地域における身近な学習拠点として公民館の果たすべき役割はますます重要になっていると言えるでしょう。

また、公民館は地域の拠点施設であるため、その地域の特性や課題が表れる場でもあります。地域の状況に即した創造的で魅力的な公民館活動が展開できれば、地域活性や課題解決にも大きく寄与できるものと考えます。沖縄県内にあるそれぞれの公民館がより魅力的な活動を行うことによって、豊かな地域社会が実現できると信じています。

今年度、『公民館を活用した芸術文化発信事業』（平成 27 年度沖縄文化活性化・創造発信支援事業）を公益財団法人沖縄県文化振興会の支援により実施してきました。

本事業では、県内の公立公民館及び類似施設を対象にした実態調査、公民館利用者を対象にしたヒアリング調査、また、調査内容やユニークな事業に関する情報を共有するためのウェブサイト作成を進めてきました。

公民館を対象に実施した実態調査では、回答団体の基礎情報、事業について、公民館についての 3 つの項目についてアンケートを行いました。その中でも事業については、特に「ユニークさ」に焦点を当てて調査を行い、「地域コミュニティを活性化する」「地域資源を発掘する」「地域課題や社会問題に取り組む」など、12 項目の視点から事業のユニークさを測っています。ここでは、公民館の運営及び事業実施における意識や課題について明らかにすることがねらいでした。

また、地域の声から表れる公民館のすがたは、今後の公民館のあり方を考えるうえで非常に重要な証言となります。ヒアリング調査では、那覇地区、南部地区、中部地区、北部地区、宮古地区の 14 公民館を対象に、推薦いただいた 23 の利用団体（サークル）のキーパーソンに、団体の活動内容とあわせ、活動に関わることになった経緯や想いなどの聞き取りを行いました。

本調査を実施するにあたり、全国公民館連合会の村上英己氏や沖縄県文化協会の仲田美加子氏、アートNPO リンクの樋口貞幸氏から、公民館をはじめとする社会教育活動や文化振興、地域づくり、市民活動等の観点からご意見いただくことで考察を深めることができました。

最後になりましたが、調査にご協力いただいた各公民館の皆さまをはじめ、沖縄県公民館連絡協議会、そして調査項目設計・検証をご担当いただいた渡邊太、大澤寅雄、樋口貞幸の各氏並びに関係各位に心より感謝申し上げます。

本調査から見えてくる公民館の実態と課題が、これからの公民館の発展について考える契機になることを願っています。

特定非営利活動法人地域サポートわかさ理事／那覇市若狭公民館館長
宮城 潤

公民館のユニークな事業に関する実態調査

調査主体

特定非営利活動法人地域サポートわかさ

調査目的

沖縄県内の全公立公民館を対象に、運営状況および活動実態に関する調査を行った。とくに、公民館が実施する「ユニークな事業」（芸術文化を活用したり、市民が主体的に参加する創造的な活動、社会・地域等における課題について取り組む活動など）の実施状況について明らかにするとともに、公民館の運営および事業実施における課題や意識について調査した。

なお、本調査の結果をふまえ、次年度以降の事業計画に活かすとともに、公民館同士の連携を強化し、芸術文化を核としたパイロット事業開発の足がかりとすることを目的とする。

調査概要

実施期間：2015 年 12 月 7 日～2016 年 1 月 25 日（50 日間）

調査方法：質問票（インターネット、FAX、持参）

調査対象：沖縄県内の公立公民館 94 館

＊生涯学習施設等に移管しているものも一部含む。

＊アンケート依頼の結果、閉館または公民館事業を実施していない、職員がいない施設が 4 館あったため、調査対象から除外した。

調査対象外としたのは、次の 4 館。（ ）内はその理由。

久米島町立具志川公民館（施設変更。現、環境改善センター）

久米島町立仲里公民館（閉館）

八重瀬町中央公民館具志頭分館（環境改善センターに併設。職員の常駐なし）

玉城中央公民館 前川分館（閉館）

回答数：51 件（59 館） | 回答率：62.8% | 有効回答数：51 件 | 有効回答率：100%

＊金武町立公民館 6 館（中央、中川地区、並里地区、金武地区、伊芸地区、屋嘉地区）は、金武町立中央公民館が取りまとめて回答したため、アンケート件数は 1 件とカウントした。ただし、回答率には 6 館をカウントした。

＊うるま市立公民館 3 館（石川地区、勝連地区、与那城地区）は、勝連地区公民館が取りまとめて回答したため、アンケート件数は 1 件とカウントした。ただし、回答率には 3 館をカウントした。

＊浦添市立公民館 2 館（中央公民館、分館）は、中央公民館が取りまとめて回答したため、アンケート件数は 1 件とカウントした。ただし、回答率には 2 館をカウントした。

調査内容

- I. 回答団体の基礎情報
- II. 事業について（「ユニーク」な事業の目的、事業内容、対象者）
- III. 公民館について（ネットワーク、関心事、運営上の課題、事業における課題）

留意点・補足・その他

- ・本調査は、特定非営利活動法人地域サポートわかさが公益財団法人沖縄県文化振興会の支援を受けて実施。質問票は、沖縄県公民館連絡協議会が取りまとめ、各教育委員会にメールにて配布した。分館、地区公民館によっては、個別にメールまたはFAXにて送付、一部は持参した。
- ・回答方法は、メール添付（ワードデータ）とインターネットフォーム、FAXにて受け付けた。
- ・調査項目設計と検証は、専門社会調査士の渡邊太（人間科学博士、大阪国際大学講師）を中心に、樋口貞幸（特定非営利活動法人アートNPOリンク事務局長）ならびに大澤寅雄（ニッセイ基礎研究所文化プロジェクト室准主任研究員）が担当し、本調査書は樋口が執筆した。また、本調査を踏まえた考察は、宮城潤（特定非営利活動法人地域サポートわかさ理事、那覇市若狭公民館館長）が担当した。

調査結果

I 回答団体の属性

(1) 職員数（館長を除く）

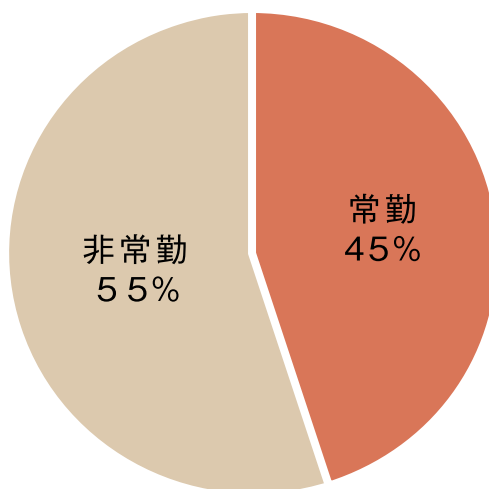
合計 213 人 | 回答数 51 | 回答率 100%

1 館あたりの職員数の平均値は 4.18 人、中央値は 2 人。

(2) 非常勤職員数

合計 117 人 | 回答数 42 | 回答率 82.4%

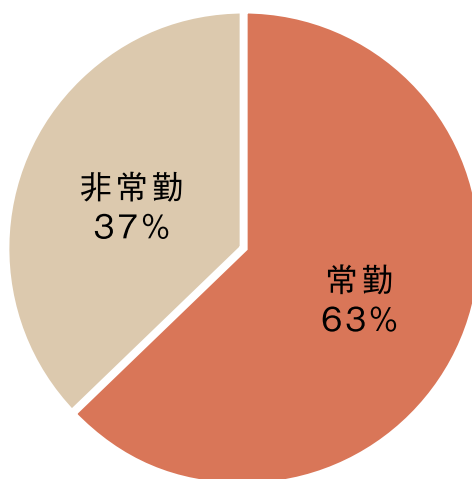
平均値は 2.79 人、中央値は 1 人。沖縄県内の公立公民館の職員のうち、半数以上を非常勤職員が占める。



(3) 館長の勤務体制

常勤 62.7% / 非常勤 37.3% | 回答数 50 件 | 回答率 98.0%

館長の 6 割は常勤である。



館長の勤務日数

回答数 50 | 回答率 98.0%

週 0 日 = 2* (*うち 1 件は「教育長が兼務しており、公民館にいないため」と注記あり)

週 1 日 = 1

週 2 日 = 1

週 3 日 = 9* (*うち 3 件に「週 3 日以上」と注記あり)

週 4 日 = 0

週 5 日 = 34

その他 = 3 : 「1 ヶ月 15 日」「不定期」「51 週 150 日」

Ⅱ 事業について

Q1 | 貴公民館が主催する事業のうち、とくに「ユニーク」だと思われる事業を3つお答えください。

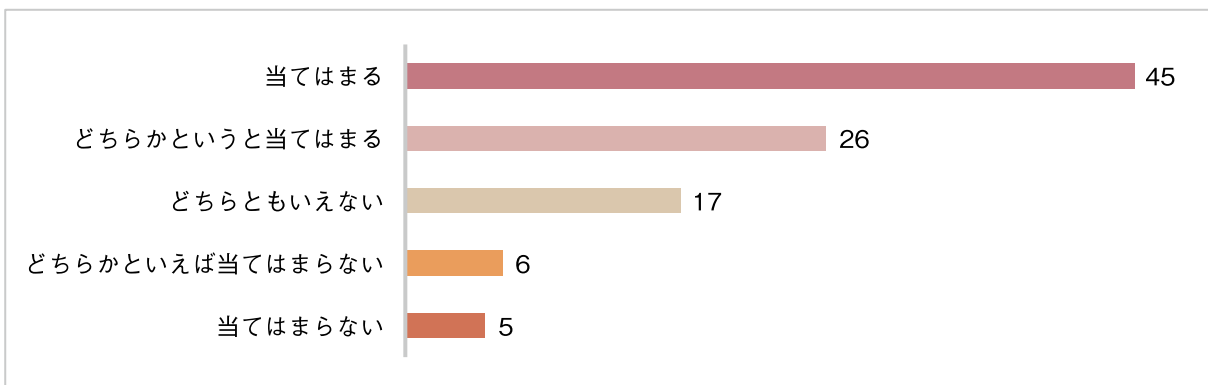
事業合計：回答総数 106 | 回答館数 51 | 回答率 100%

(内訳)

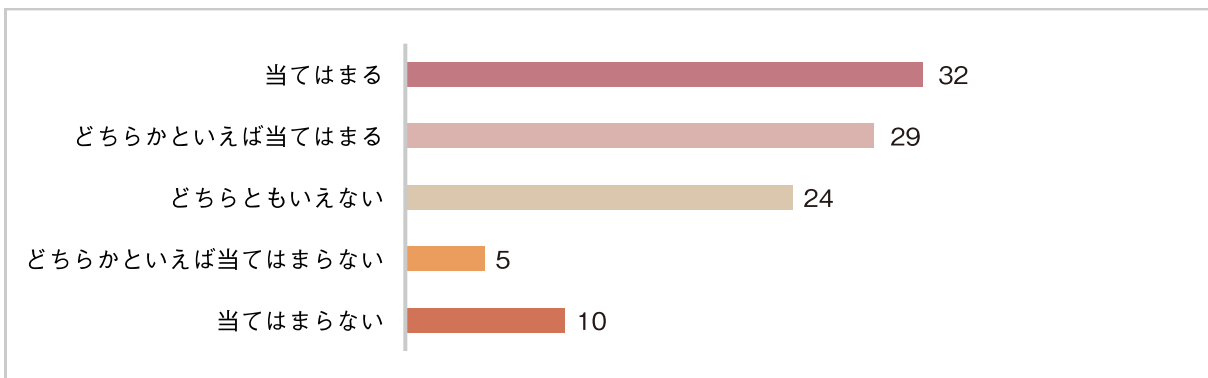
- ・事業 A：回答数 51（ただし、うち2件は「該当無し」「無し」と回答）
- ・事業 B：回答数 30（ただし、うち2件は「該当無し」「特になし」と回答）
- ・事業 C：回答数 25（ただし、うち2件は「該当無し」「特になし」と回答）

Q1-1 | 上記事業の趣旨に該当ものを、下記の1から12についてお答えください。

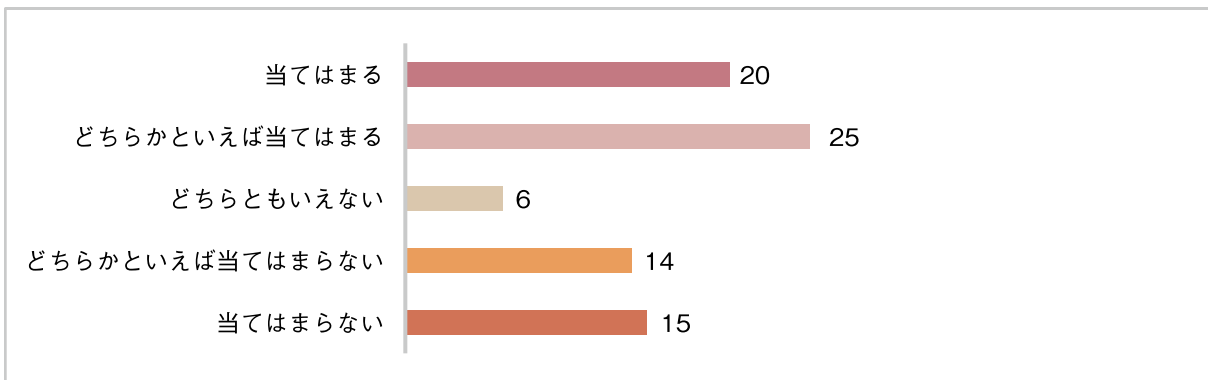
1 地域のコミュニティを活性化する 回答数 99 | 加重平均 3.01



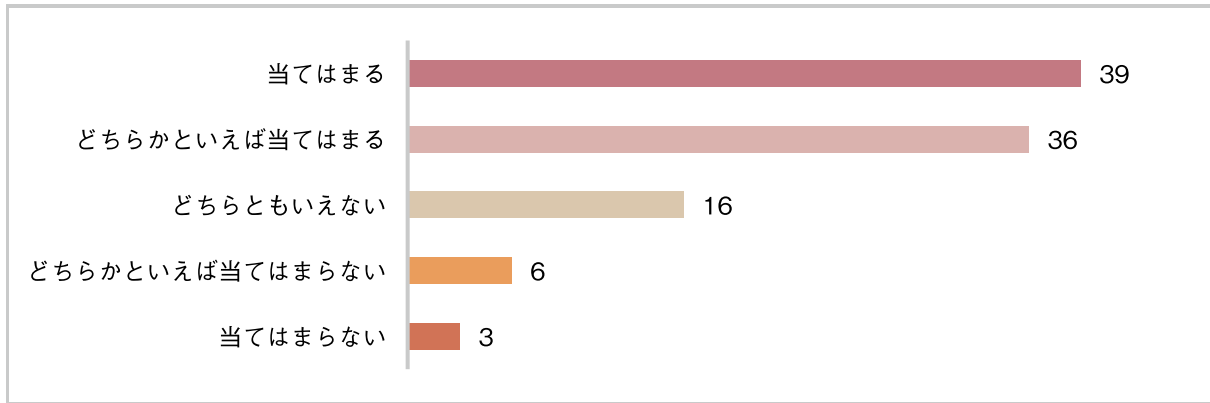
2 地域資源を発掘する 回答数 100 | 加重平均 2.68



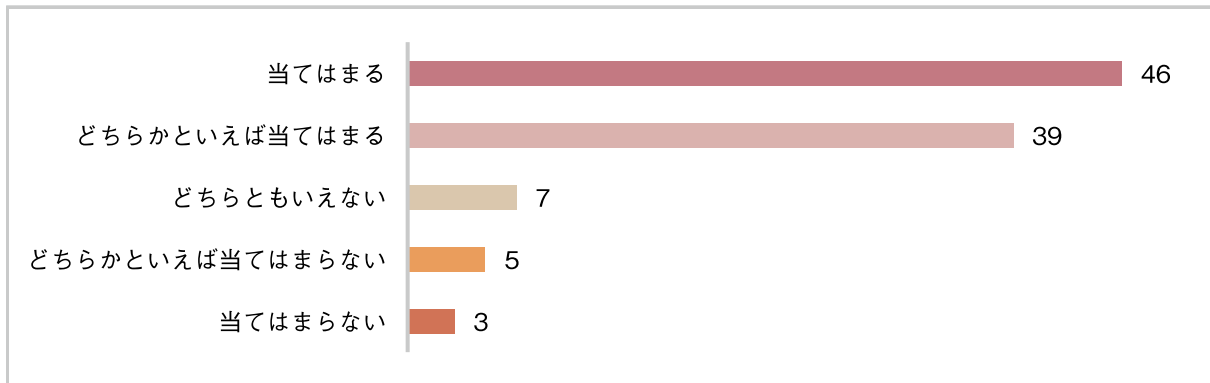
3 地域課題や社会問題に取り組む 回答数 100 | 加重平均 2.21



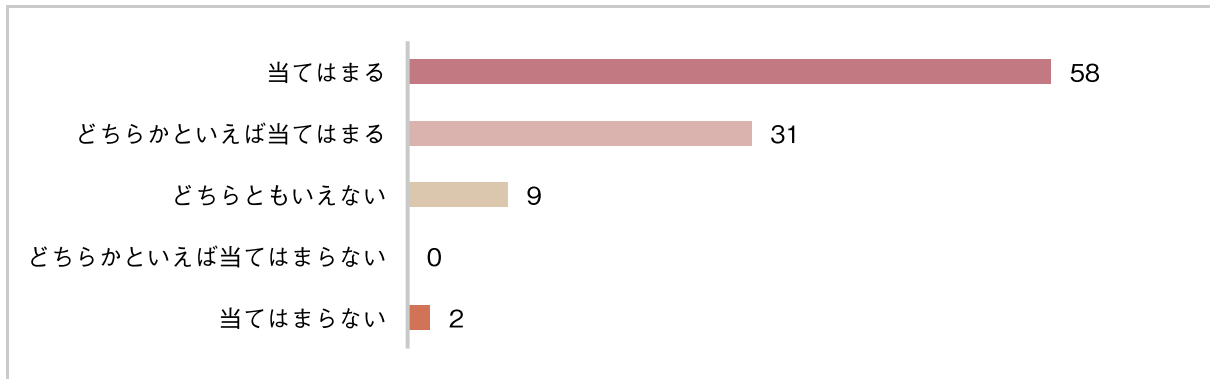
4 学習の成果を社会で活かせるようになる 回答数 100 | 加重平均 3.02



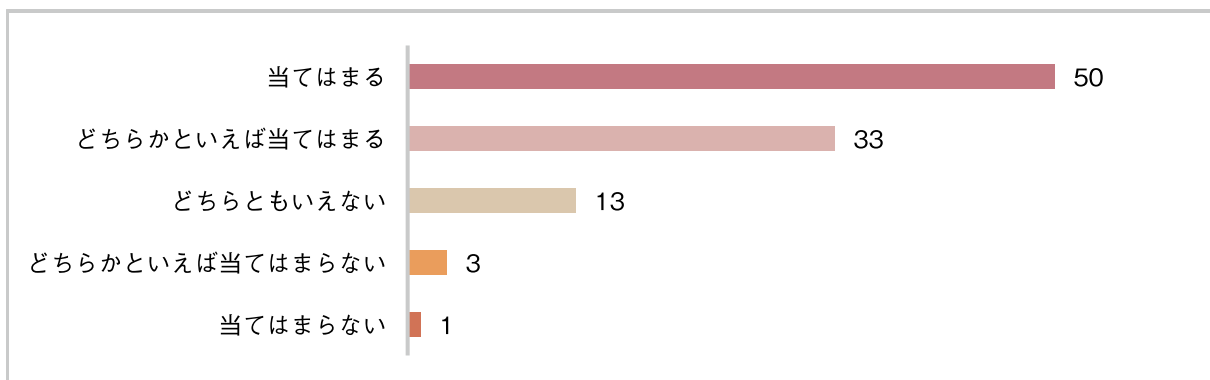
5 多様な学びを提供する 回答数 100 | 加重平均 3.20



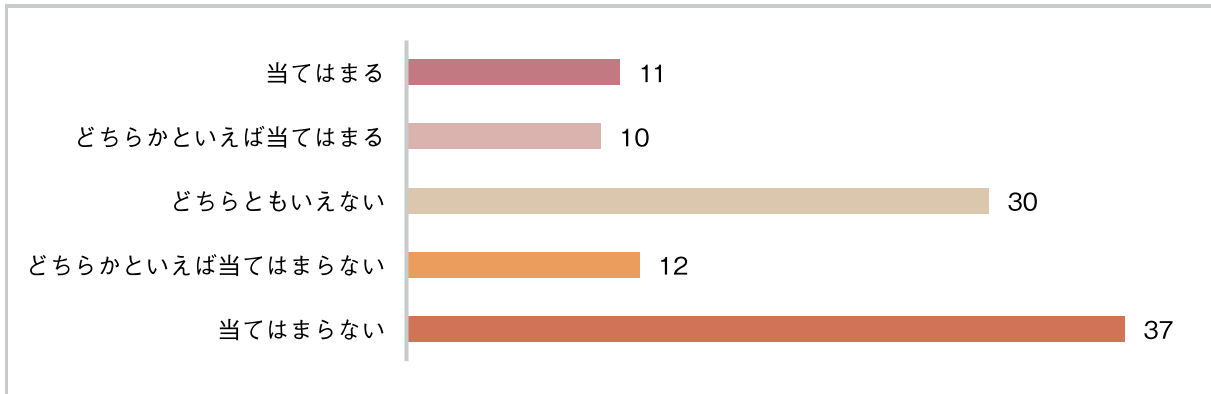
6 利用者同士のつながりをつくる 回答数 100 | 加重平均 3.43



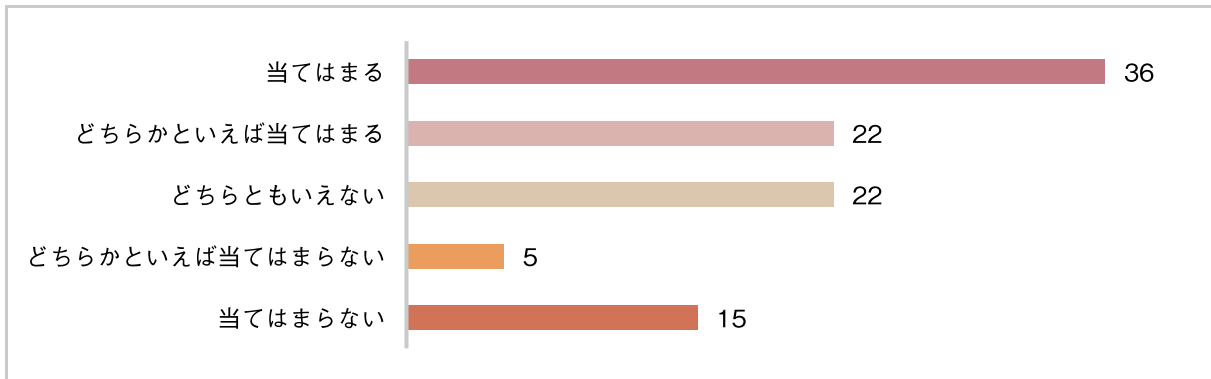
7 公民館の存在意義が高まる 回答数 100 | 加重平均 3.28



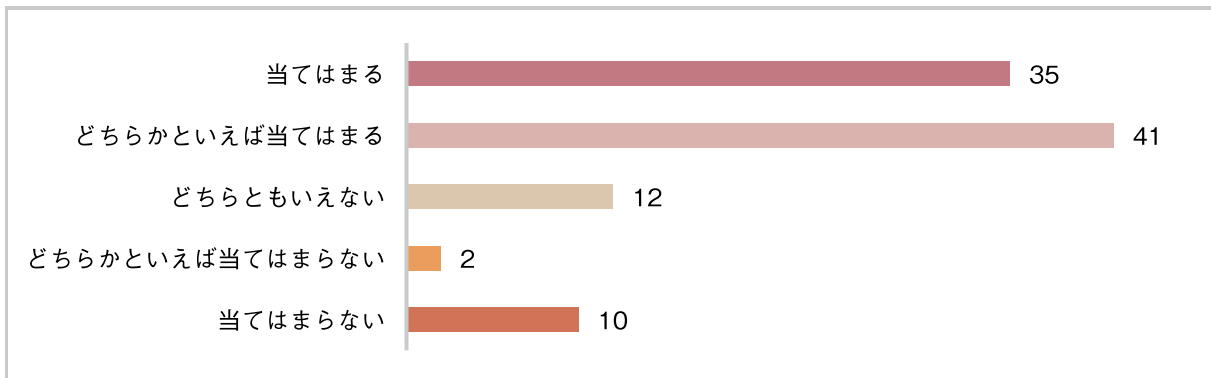
8 メディア戦略を重視する 回答数 100 | 加重平均 1.46



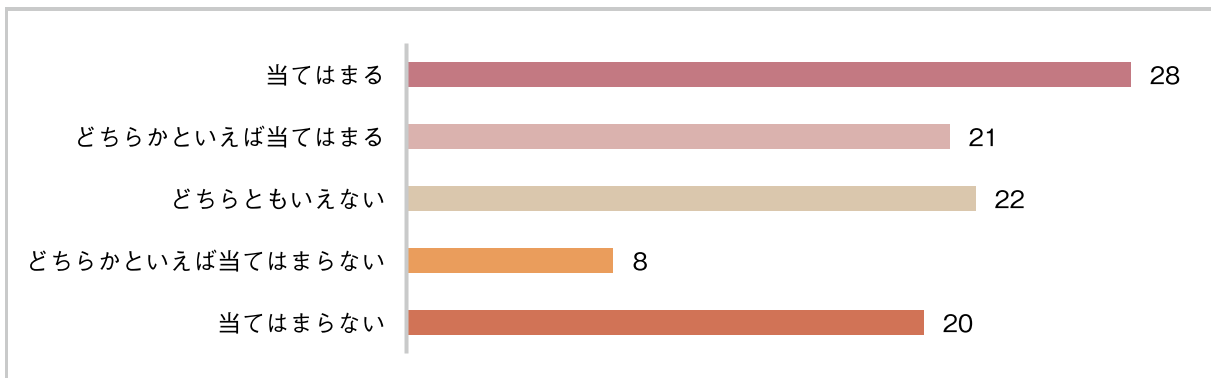
9 関連機関と連携している 回答数 100 | 加重平均 2.59



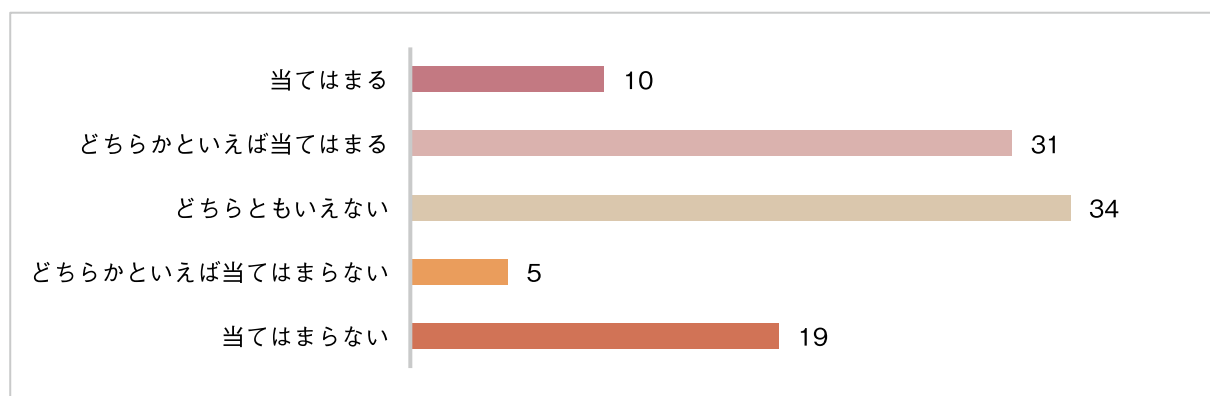
10 新たな価値観に触れる 回答数 100 | 加重平均 2.89



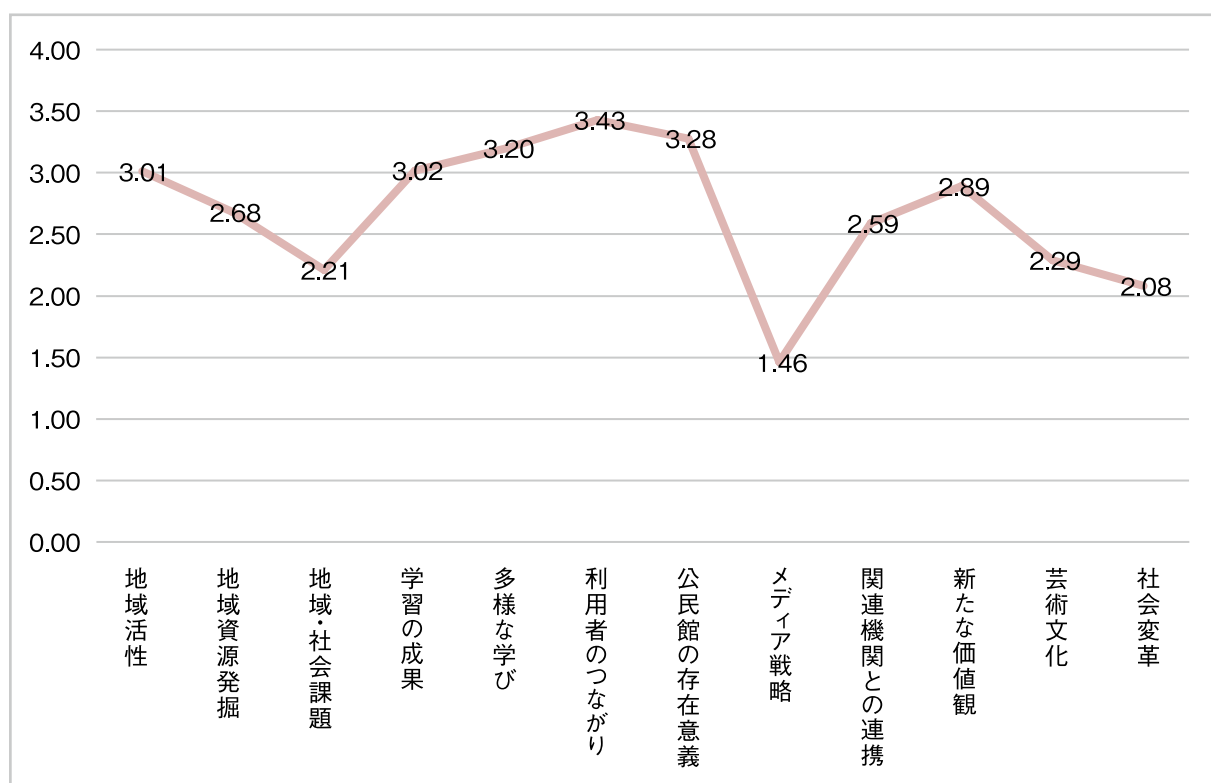
11 芸術文化に触れる機会を拡大する 回答数 99 | 加重平均 2.29



12 社会変革の一步を踏み出せる 回答数 99 | 加重平均 2.08



「ユニーク」だと思う 3 事業の主旨の加重平均グラフ



上図は、当てはまるを4点、どちらかといえば当てはまるを3点、どちらともいえないを2点、どちらかといえば当てはまらないを1点、当てはまらないを0点とし、事業A～Cの加重平均をグラフにしたものである。

「ユニーク」な事業を通じて、公民館を利用するもの同士のつながりを促進し、多様な学びの場を提供し、新たな価値観に触れる機会づくりに取り組む公民館の姿が示された。また、それら事業は、公民館の地域での存在意義を高め、地域活性に寄与していると捉えている。

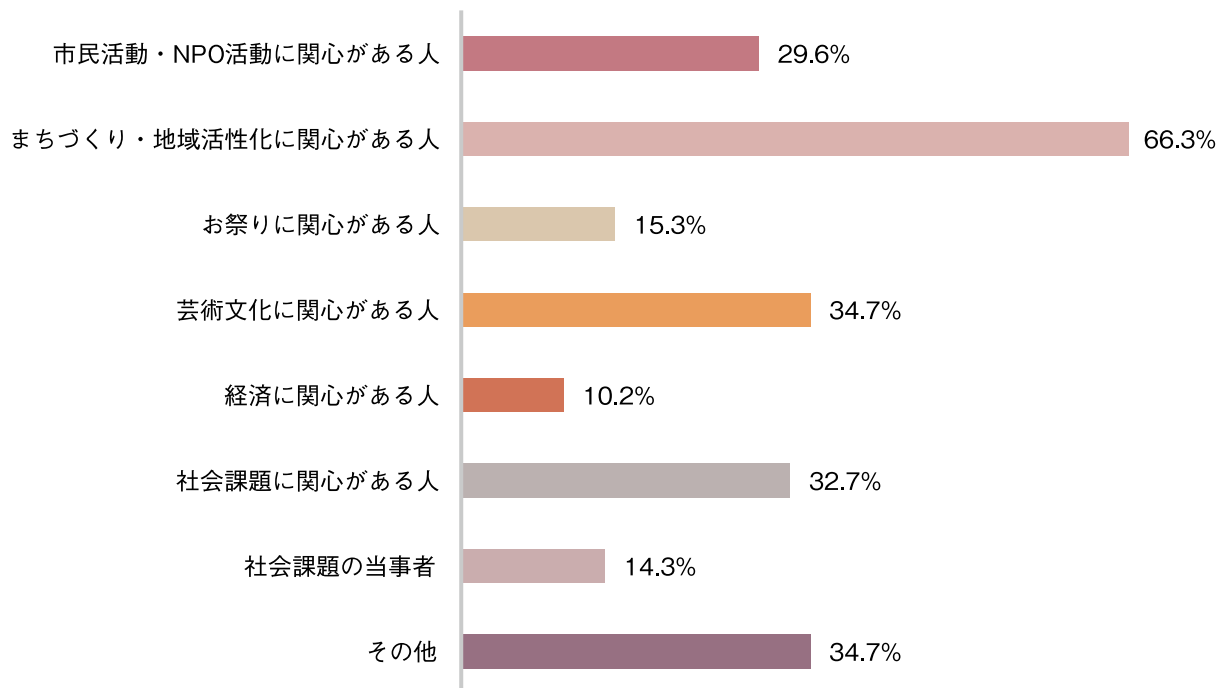
芸術文化を活用して社会変革を促すような取り組みや、地域課題や社会問題に関する取り組みも一定数みられる。なお、メディア戦略についてはいずれの事業も注力していないということが明らかとなった。

また、およそ半数（54.9%）の公民館が、2事業以上の「ユニーク」な事業に取り組んでいる。

Q1-3 | 「ユニーク」だと思ふ事業では、どのような人に参加してもらいたいですか？（複数回答）

合計 98

- ・事業 A： 回答数 47
- ・事業 B： 回答数 27
- ・事業 C： 回答数 23



「ユニーク」だと思ふ事業に対して、どのような人に参加をしてもらいたいかを問うた。なお、事業 ABC の優先順位は問うていない。

事業にもっとも参加してもらいたい人は、まちづくりや地域活性化に関心をもつ人で 66.3% あった。つぎに芸術文化に関心がある人 (34.7%)、社会課題に関心がある人 (32.7%)、市民活動・NPO 活動に関心がある人 (29.6%) が約 3 割ある。他方、お祭りに関心がある人 (15.3%)、社会課題の当事者 (14.3%)、経済に関心がある人 (10.2%) は低い。

また、その他への回答も多い。その他回答は、次の通りである。

その他回答：

学生 (小・中・高)：17

子どもを持つ親：7

地域住民・村民等：6

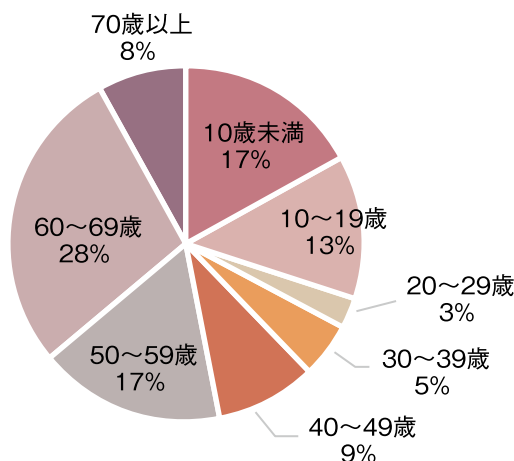
健康に関心がある方：2

地域で活動している方／おしゃれに関心のある人／自然体験、科学体験に関心がある人／英語・読み聞かせに関心がある人／教育関係者／琉球史や文化を学びたい若者／青少年健全育成や学校・地域連携に関心がある方／フラダンスを始めてみたい成人女性：1

Q1-4 | 「ユニーク」だと思ふ事業では、どの世代の参加者がもっとも多かったですか？（単一回答）

回答数合計 96

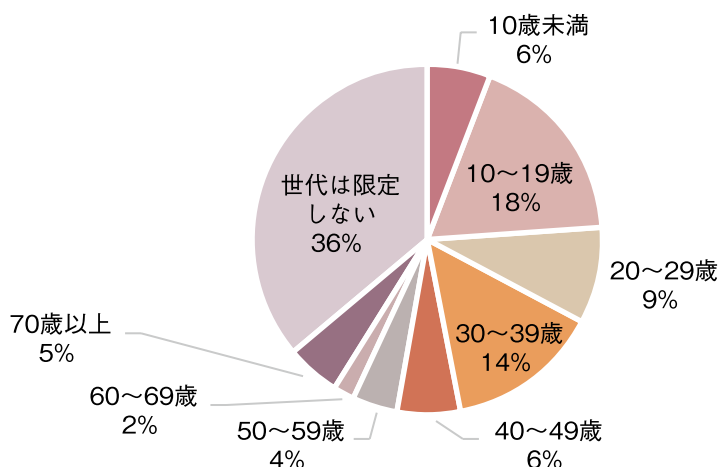
事業 A | Q1-4 回答数 46 / 事業 B | Q1-4 回答数 28 / 事業 C | Q1-4 回答数 22



Q1-5 | 「ユニーク」だと思ふ事業には、どの世代にもっと参加者してもらいたいですか？（単一回答）

回答数合計 100

事業 A | Q1-5 回答数 49 / 事業 B | Q1-5 回答数 28 / 事業 C | Q1-5 回答数 23



「ユニーク」だと思ふ事業の参加者について問うた。上の2つの円グラフを比較してみたい (Q1-4、Q1-5)。Q1-4 図はどの世代の参加者が多かったかをあらわし、Q1-5 図はどの世代にもっと参加してもらいたかったかをあらわしている。

実際の参加者の過半数は50歳以上であり、もっとも多い世代は60～69歳である。つぎに多い世代が10歳未満と50～59歳で、同率でならぶ。20～29歳、30～39歳、40～49歳に至っては、その3世代をあわせても全体の20%に満たない。

一方、参加してもらいたかった世代は、世代は限定しないがもっとも多く36%。そして、10～19歳が18%、30～39歳が14%、20～29歳が9%、40～49歳が6%となった。ユニークな事業には、世代は限定しないものの、50歳以下の世代にもっと参加してもらいたいという思いがあらわれている。

40～49歳の参加者は、実際の参加および参加への期待ともに低い、世代人口は最も多く*1、高齢層と若年層をつなぐ役割としても、この世代を巻き込めるかどうかは鍵となるかもしれない。

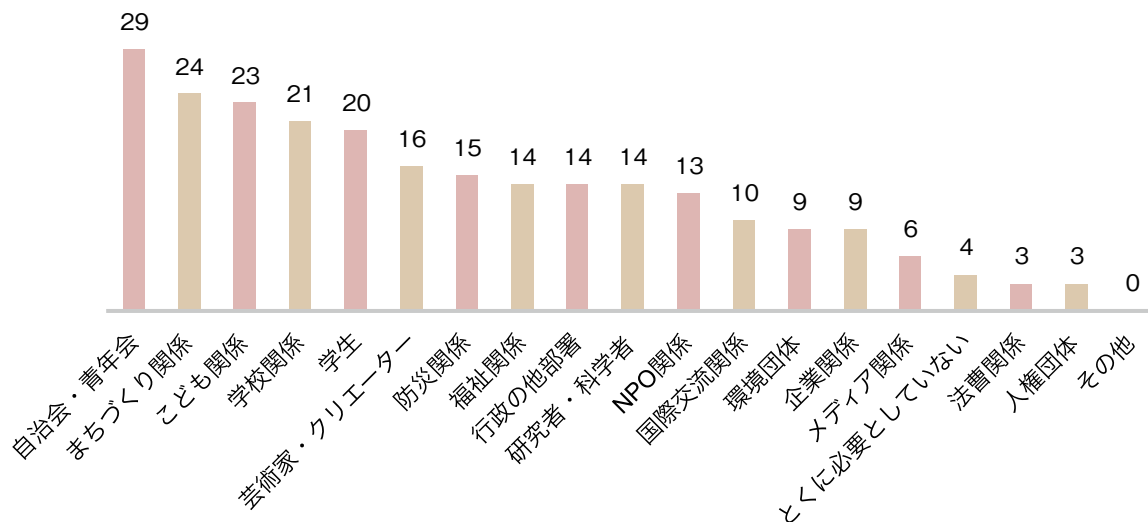
*1 | 沖縄県「住民基本台帳年齢別人口（平成27年1月1日）市町村、男女、年齢5歳階級別人口総数」をみると、40～49歳が最も多く200,599人。ついで多い世代が30～39歳の195,038人、60～69歳の172,954人であった。なお5歳階級別人口では、多い順に40～44歳が107,700人、35～39歳が101,460人、60～64歳が101,111人であった。

Ⅲ 公民館について

Q2 | どのようなひとたちとネットワークをつくりたいですか？（複数回答）

回答数 50

1 館あたりの回答数の平均値：4.86



公民館は、第一に、自治会・青年会と連携することで、地域コミュニティとの関係強化を図りたいと考えている。

そのつぎに、まちづくり関係、こども関係、学校関係、学生とのネットワークを希望している。この傾向は、Q1-3ならびにQ1-5とも関連がみられる。まちづくり・地域活性化に関心のある地域住民をバックアップするまちづくりの専門家の参画を必要とし、地域の次代を担う若い世代との接点づくりを望んでいる。この傾向を、これからの地域づくりを志向する《未来型》のネットワークと呼びたい。

そして、芸術家・クリエイター、防災関係、福祉関係、行政の他部署、研究者・科学者、NPO関係がふたつめの層を形成している。これらはいずれも専門的なスキルを必要とする職種であることから、これを《専門家型》のネットワークと呼ぶことにする。

企業関係は少ないながらも環境団体とならび9館がネットワークをつくりたいと回答している。企業関係とのネットワークを希望する意見は、都市部の公民館に多くみられた。

Q1-1と同じく、メディア関係とのネットワークを求める回答は少ない。しかし、これからの地域を担う《未来型》ネットワークには、若年層の参加が求められている。若年層はメディアとの親和性が高いことはいままでもない。若年層の公民館に対するアクセシビリティを向上させるためには、メディア関係とのネットワークづくりを無視することはできない。

法曹関係、人権関係は3館と少ない。

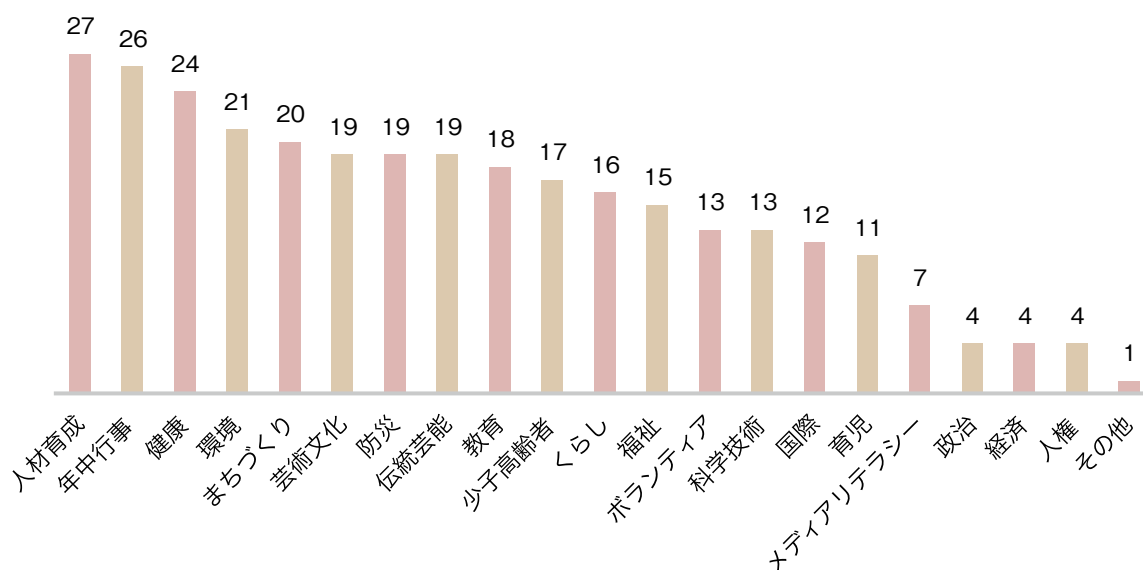
とくに必要としていないという回答も4館からあった。とくに必要としていない理由まで聞いていないが、推測するに、現状すでに必要なネットワークを構築している場合と、ネットワークの構築と維持に避けるほど余裕がない場合が考えられる。いずれにしても、いま以上にネットワークの拡張を必要としていない館もある。その一方、ほぼ全てにチェックしている館も少数ながらあり、幅広くネットワークを構築しようとする意欲が感じられる。

なお、1館あたりの回答数の平均をとると、4.86件であった。

Q3 | 今後取り組んでみたい関心事はなんですか？（複数回答）

回答数 50

1館あたりの回答数の平均値：6.2



今後取り組んでみたい関心事のうちもっとも高いのは、人材育成であった。公民館の設置目的のひとつに人材育成が位置付けられていることから、人材育成に対する関心が高いことは合点がいく。関心事として高く位置付けられている人材育成、まちづくりを、ここでは《未来型》の志向と名付けておきたい。

年中行事、健康への関心も極めて高いことがみてとれる。環境、防災、伝統芸能、くらしなどは、社会からの要請が反映された結果といえよう。これを、《維持型》の志向と名付ける。

ここでも政治、経済、人権への関心は低く、Q2の結果と共通する。いずれも取り扱いにくい主題ではあるが、人の営みにおいて避けられない主題でもあることから、なんらかの事業開発が望まれる。

そして、芸術文化と伝統芸能がともに19件と高い点をとくに指摘しておきたい。Q2で伺った求めるネットワークに芸術家・クリエイターが16件みられたように、芸術文化事業に対する要請は、つねに一定程度みられる。芸術文化、教育、科学技術といった社会に変化をもたらす事業を《クリエイティブ＝イノベティブ型》の志向と位置付けてみたい。

調査検証の域を超えるが、《クリエイティブ＝イノベティブ型》志向の重要性について指摘してみたい。公民館事業は、人材育成やまちづくりといった《未来型》志向と、健康、環境、防災などくらしにまつわる《維持型》志向のふたつの軸で構成されている。そのふたつの軸をつなぐ存在として《クリエイティブ＝イノベティブ型》志向を位置付けることは、あたらしい未来像を描くうえで極めて重要なことがわかる。

Q1-4、Q1-5の集計結果でも指摘したとおり、ユニークな事業の高齢者層の参加は充実しているが、もっと若い世代に参加を期待している現状が示されている。《維持型》志向を支える高齢者層に比べると、《未来型》志向の担い手として期待される若年層の参加が弱い。このことから、《維持型》志向の活動で培われたノウハウを《未来型》志向の活動に活用するためにも、両者をつなぐ何らかの仕掛けが必要である。

例えば、Q1の貴公民館が主催する事業のうち、とくに「ユニーク」だと思われる事業の記述に、「みつばちの生態については日常生活において貴重な体験であり、できたてのはちみつを採取して食すること。はちみつが出来るまでの作り手の苦労やキャリア（仕事）について学ぶ」、「ゲームしながら楽しく自然について学ぼう！自由研究や工作の宿題も役立つよ！をテーマに環境問題への気づきのきっかけをつくり、見方を変えて自然体験を学んでもらいました」といった事例が見られる。こうした事例では、芸術文化、教育、科学技術などを、日常のくらしや地域の環境に組み込むことで、《未来型》志向と《維持型》志向の両軸をつないでいる。公民館の人材育成に関する事業の中でも、ユニークかつ重要な役割を果たしていると思われる。

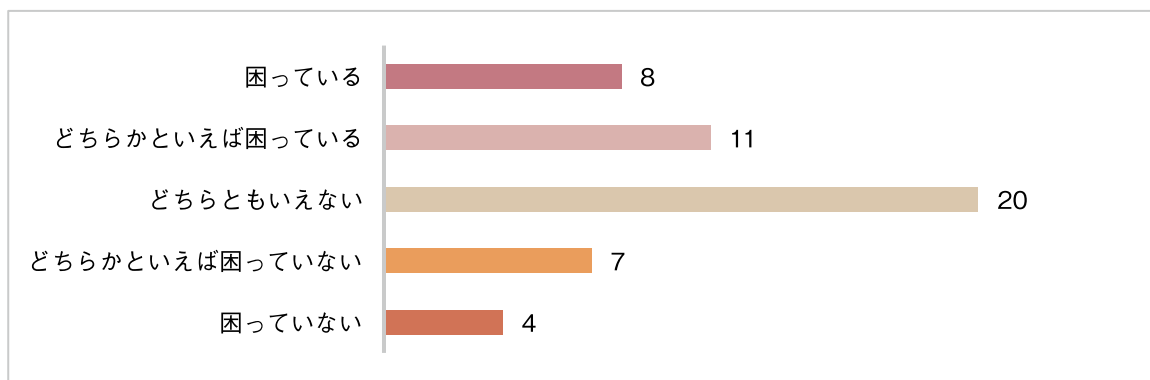
現代社会の課題に対してクリエイティブな思考を育み、イノベーションをひきおこすことでつぎなる未来を創造していく。公民館の事業に、《クリエイティブ＝イノベティブ型》の志向が求められている。

Q4 | 貴公民館の運営ならびに事業上の困り事はなんですか？

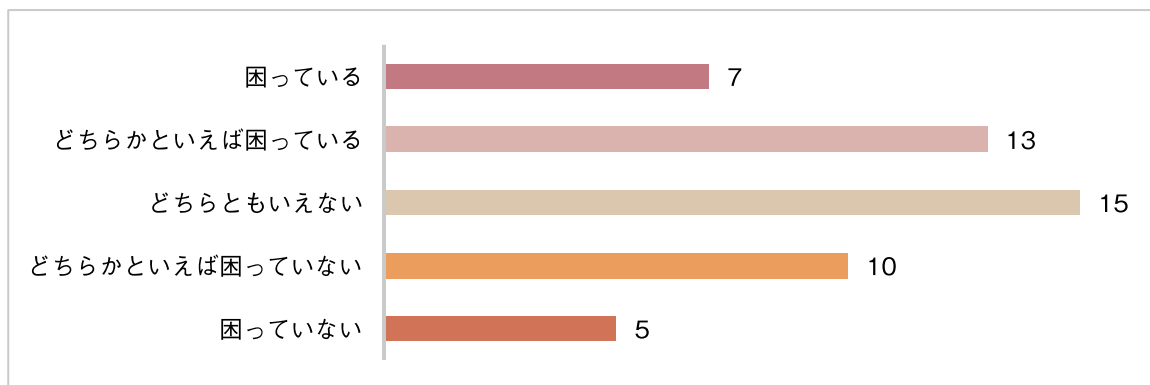
Q4-1 | 運営上の課題

回答数 50

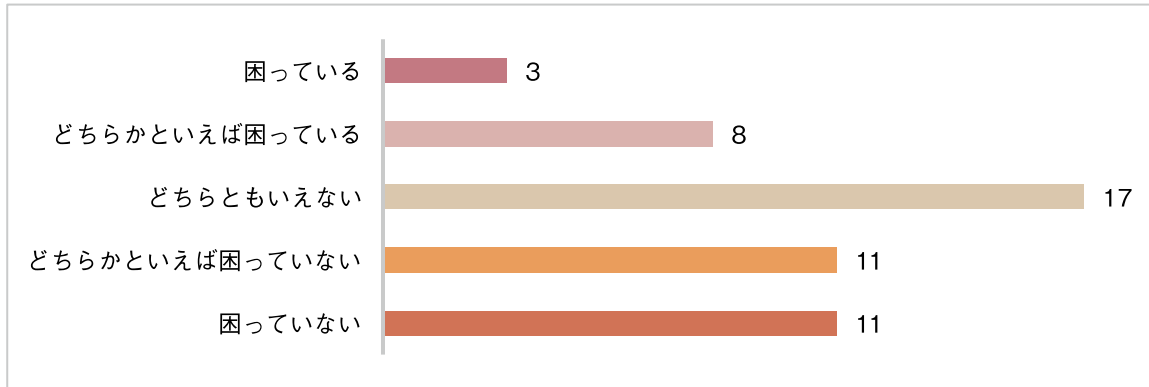
1. 専門的な知識をもった職員が不足している



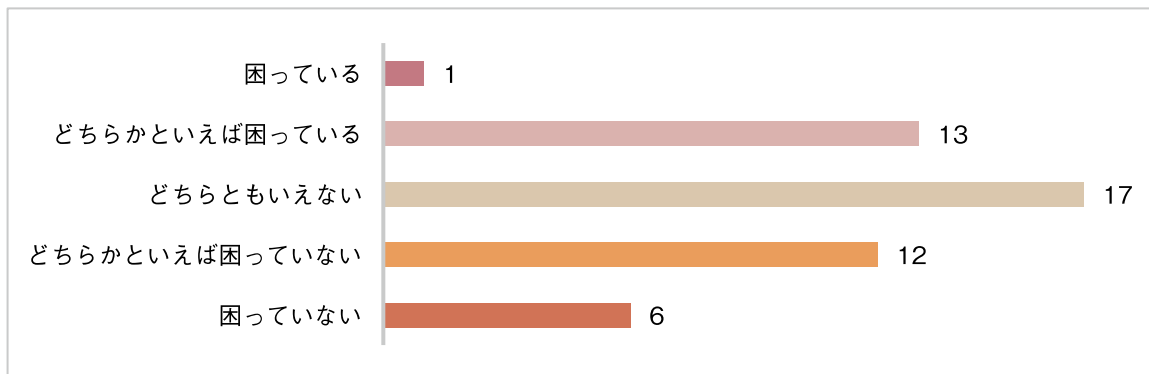
2. 職員の異動により関係者とのネットワークの維持が困難になる



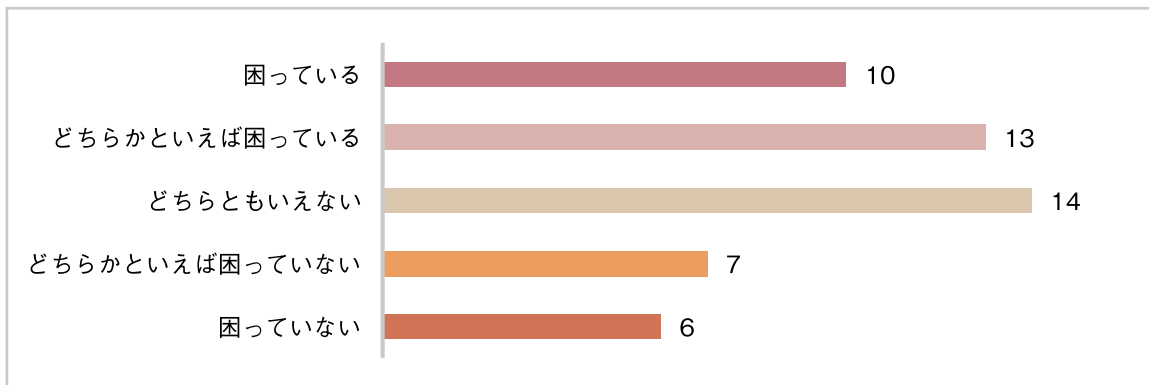
3. 公民館の活動が地方公共団体（自治体）に十分に理解されていない



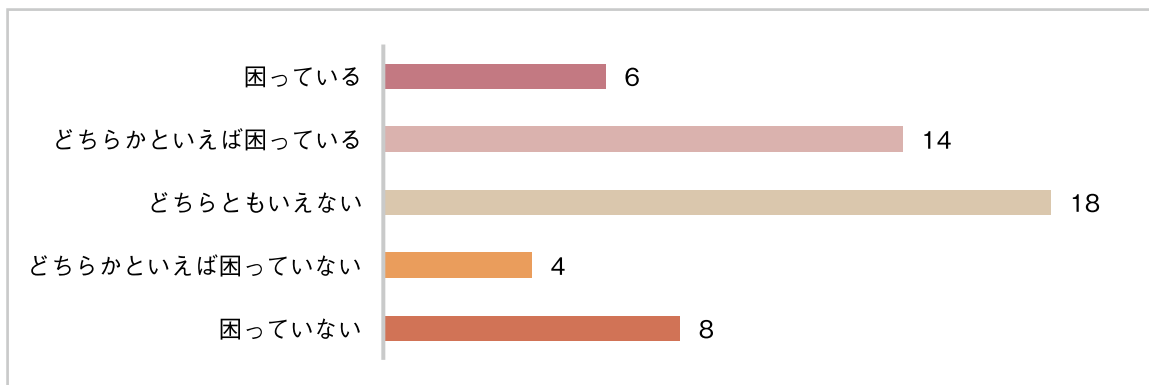
4. 公民館の活動が市民に十分に理解されていない



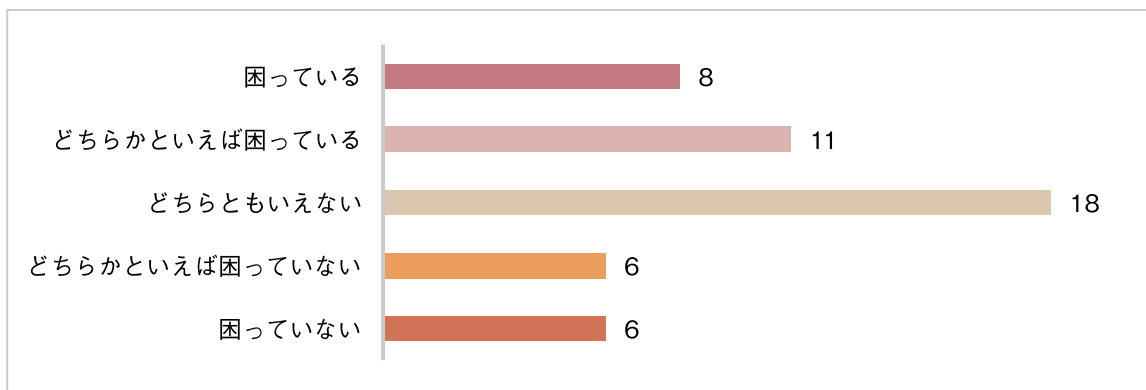
5. 組織や人員の面で十分な体制を整えられない



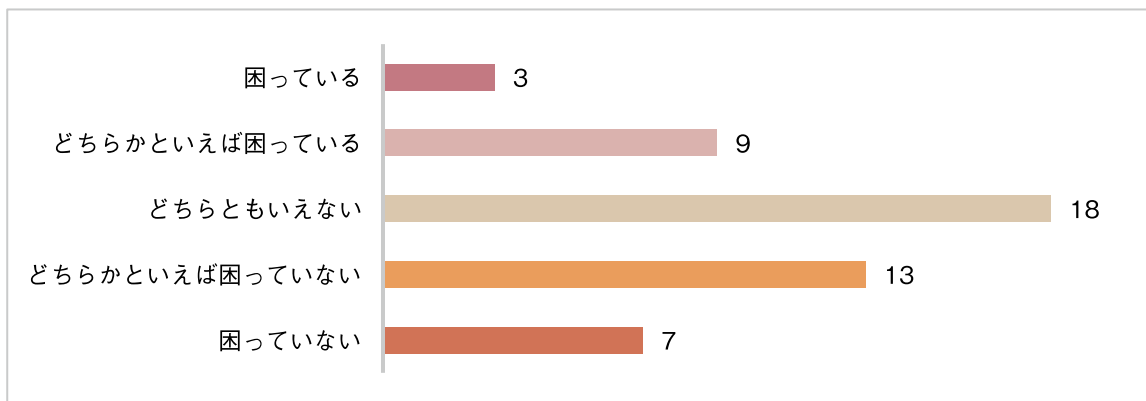
6. 長期的なビジョンや目標、事業戦略を描けない



7. 公民館の運営に関するノウハウや経験が不足している



8. 職員間でビジョンや問題意識を共有できていない

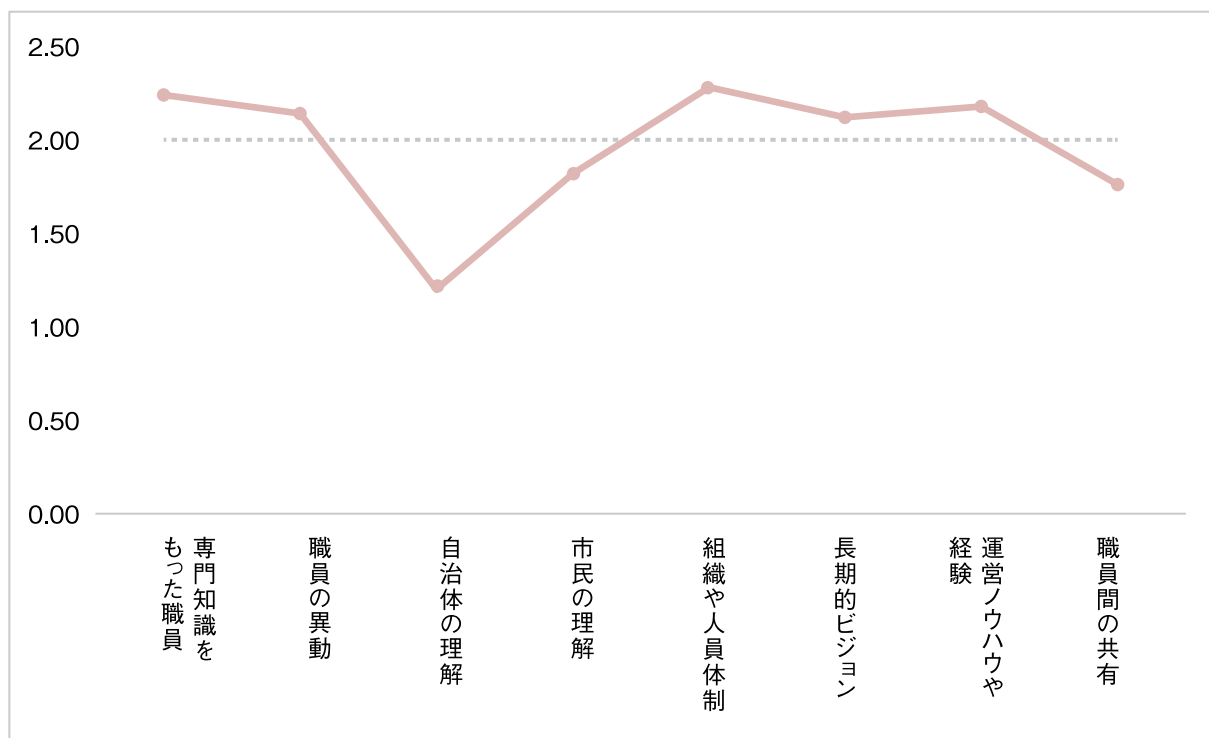


9. その他（自由記述）

回答数 5 件

- ・ 公民館サークルで長期にわたり活動するサークルの既得権と新規団体の利用
- ・ 公民館講座受講者・利用者の 10 代～ 40 代の利用率向上
- ・ 若い人は働きざかりで公民館事業に参加できていない
- ・ 公民館運営を専門とする職員がいない
- ・ 利用者の偏り

運営上の課題の加重平均グラフ



上図は、運営上の課題について、困っているを4点、どちらかといえば困っているを3点、どちらともいえないを2点、どちらかといえば困っていないを1点、困っていないを0点として加算し、その平均点をグラフ化したものである。2点のラインを超えると困り度合いが高くなり、下がると困り度合いは低いことを示している。一見すると、どちらともいえないへの回答が多くみられるようだが、加重平均をとってみると、その傾向が微細ながら浮きあがってくる。

ここで明らかになるのは、つぎのとおりである。

公民館の自治体理解ならびに市民理解は一様に高いと捉えられており、課題に感じていない。また、職員数の平均は4人強（中央値は2人）と少人数で運営していることから、職員間の情報や意思共有もなされている。

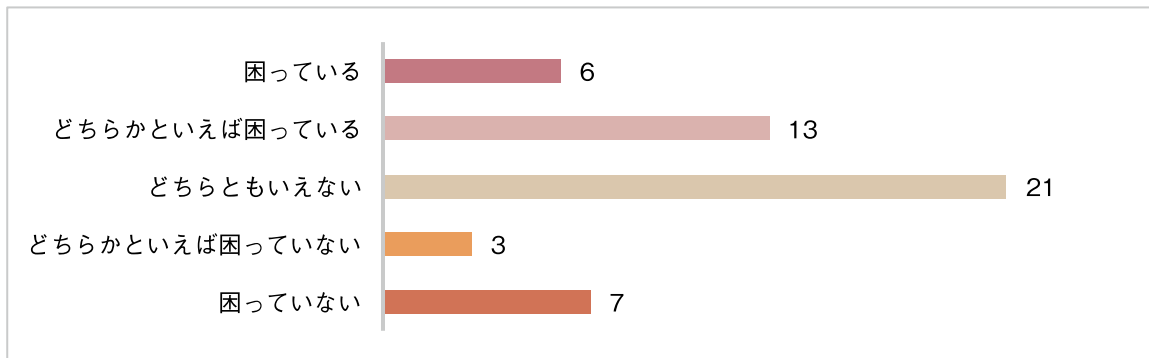
しかし、組織や人員の面で十分な体制を整えられず、専門的な知識や運営のノウハウをもった経験豊かな職員が不足し、長期ビジョンや事業の目標、その戦略を描きづらく、ネットワークの維持に困難をきたしている傾向がグラフから読み取れる。現状は維持できるとしても、中長期的なビジョンを立てて公民館活動を充実・発展させるには困難があることが伺われる。

また、その他回答をみると4件は、利用者の固定化を課題にあげており、利用者の新規開拓ができていないことを困りごとと捉えている。ここもQ1-5との関連を指摘できよう。公民館の困りごとに、働き盛り世代や若年層といった《あらたな利用者》の開拓と、そのアクセシビリティの低さがあげられる。

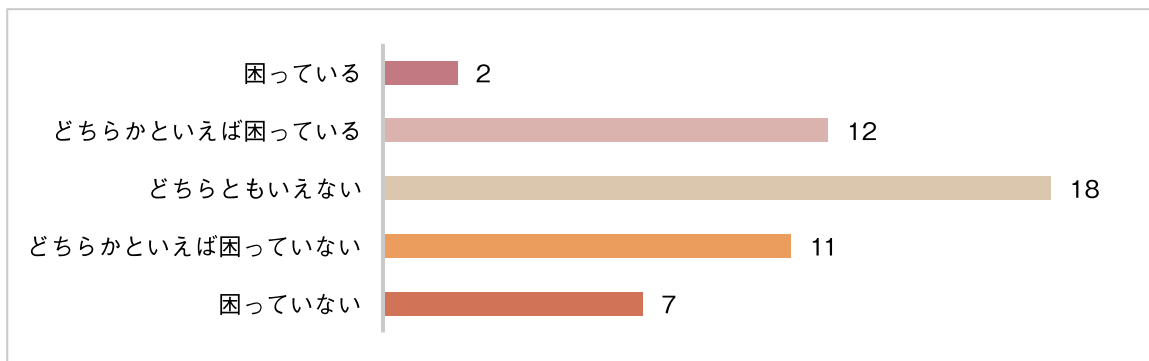
Q4-2 | 事業における課題

回答数 50

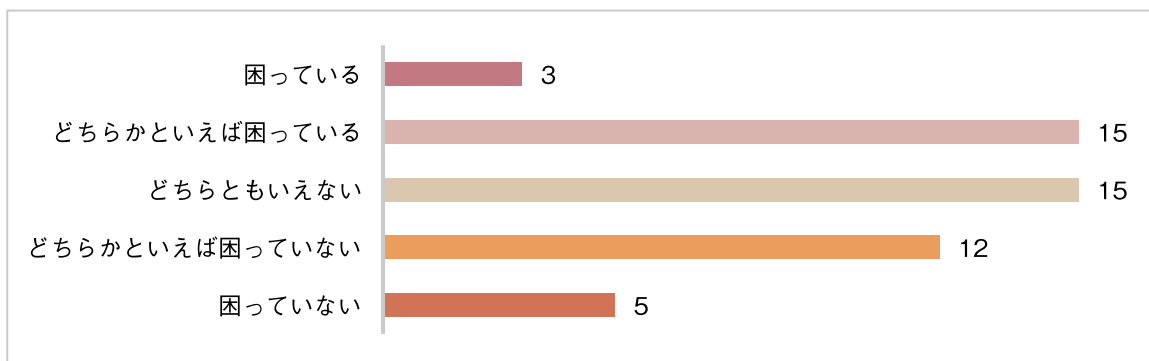
1. 公民館利用者が固定化している



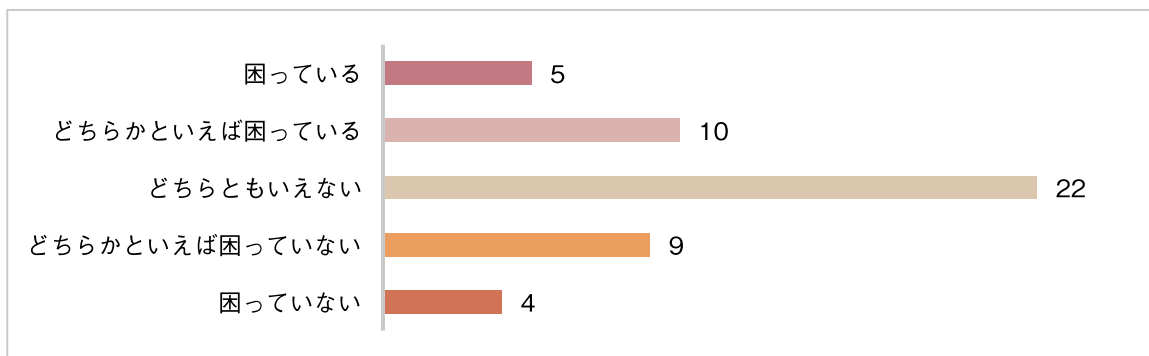
2. 主催事業参加者が固定化している



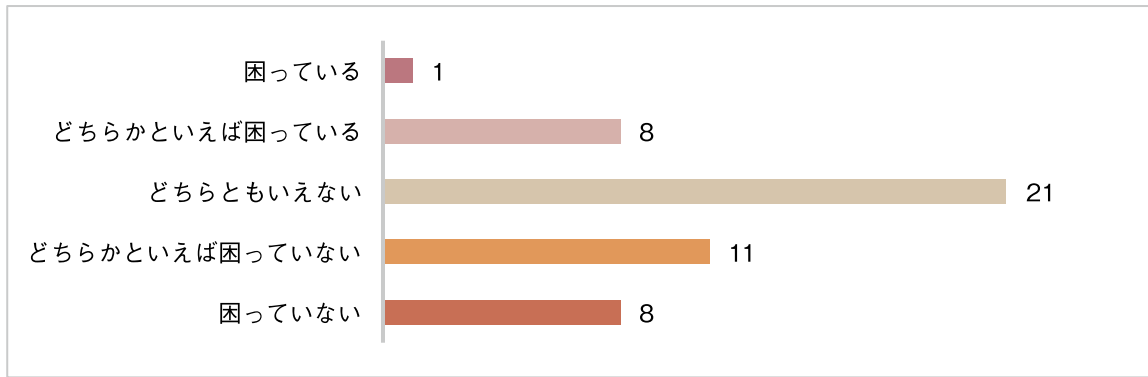
3. 主催事業の参加者に偏りがある



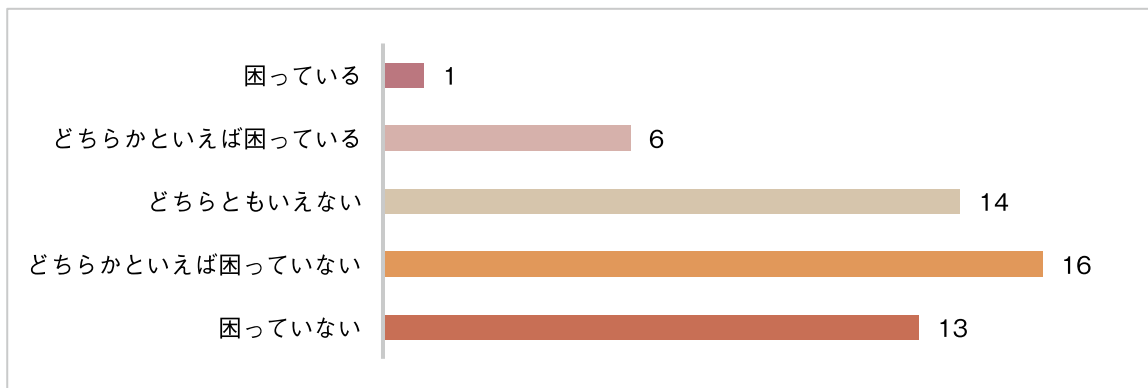
4. 専門家との接点がない



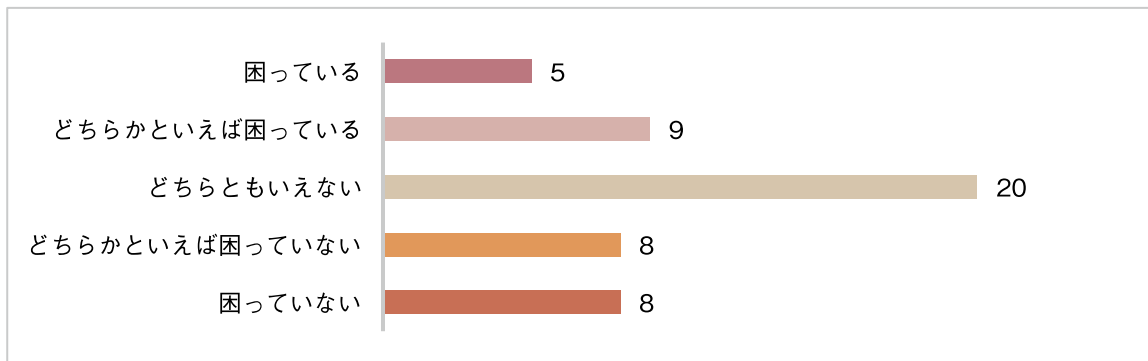
5. 地域のニーズが把握できていない



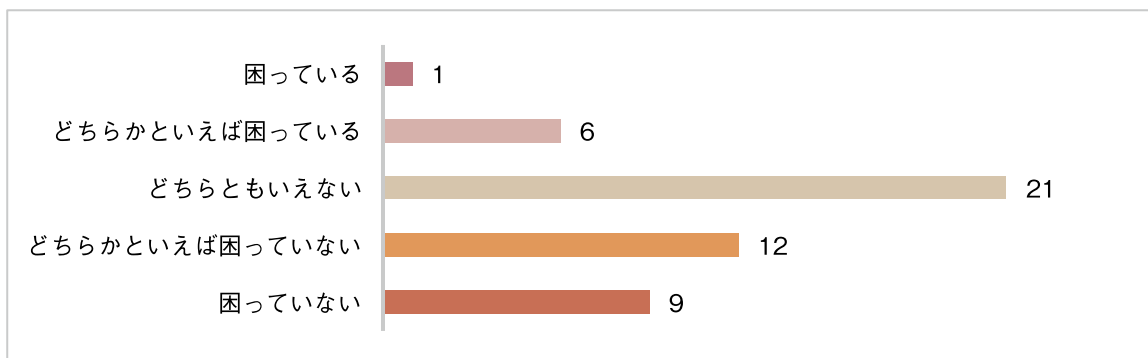
6. どのように広報したらよいかわからない



7. 事業の予算が十分ではない



8. 予算や経費が使いづらい

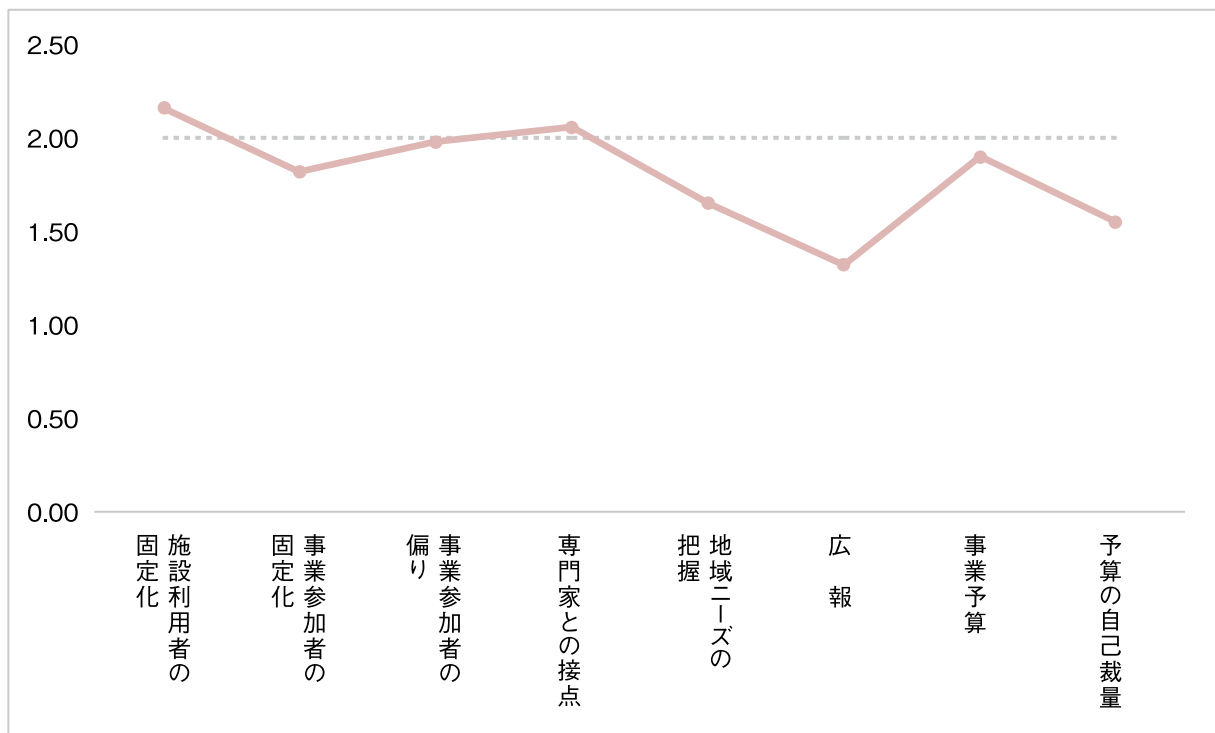


9. その他（自由記述）

回答数 3 件

- ・ 印刷製本代が写真プリントのみ使用なので使いづらい
- ・ 公民館の予算はなく、教育委員会で行っている事業を公民館事業としている
- ・ 事業企画・実施・評価（プロセス・展開）学習ニーズ及び必要な学習を踏まえて事業を企画・実施することで、サークル活動や社会貢献活動へ移行・支援が円滑におこなえる

事業における課題の加重平均グラフ



上図は、困っているを4点、どちらかといえば困っているを3点、どちらともいえないを2点、どちらかといえば困っていないを1点、困っていないを0点として加算し、その平均値をとったものである。

本質問でも、どちらともいえないへの回答が比較的多くみられた。

一見してわかるとおり、とりわけ顕著に現れたものは、広報に関して困っていないという回答である。また、運営上の課題とは異なり、事業においては、利用者の固定化や参加者の偏りについては、必ずしも課題として認識しているわけではないことがわかる。

これまでの設問で繰り返しみられたとおり、若年層や働き盛り世代の参加は少なく、該当する世代に対するアプローチもできていない。しかしながら、人口の少ない地域では、そもそも若年層が少ないこと、事業の参加者数でみると定員に達する事業も多いこと（別紙「ユニーク」な事業一覧参照）、事業として成功していると判断していること、固定利用者にとって公民館が居場所として機能しており公民館が担うべき役割を果たしていると捉えているためだと推測される。また、若年層に向けた新規事業を開発するには予算は限られており、事業開発に長けた専門的な知識と経験をもった職員が不足しているのは、すでに指摘の通りである。

とはいえ、ただ現状を維持していても、公民館自体の存在意義は薄れていく。本来ならば、地域課題、社会問題の複雑化にともない、ますます社会教育施設の役割の比重は高まるはずである。

地域の《未来》にむけ、現代社会に即応した教育、学術、文化といった《クリエイティブ》な事業をおこない、もって地域住民の教養の向上、健康の増進、情操の純化をはかり、生活文化の振興と社会福祉の増進に寄与することは、公民館の使命である。

以上

「ユニーク」な事業一覧

Ⅱ．事業について

Q1 貴公民館が主催する事業のうち、ユニークだと思われる事業を3つおこたえください。

	公民館名	事業名	主 旨	参加者数	参加費	なぜこの事業が「ユニーク」だと思いますか？
1	今帰仁村中央公民館	ブーゲンビリア育成教室	身近な植物として親しまれているブーゲンビリアの育て方を学ぶ	20 人		植物に触れ、栽培するところ。
		中国語講座	観光客の増加で日常的に耳にするようになった中国語に、慣れ親しむ	25 人		外国語を対象としたところ。
		男の料理教室	気軽に料理に挑戦することで、自炊のできる男性を増やす	15 人	材料代	男と限定したところ。
2	本部町谷茶辺名地行政区事務所、谷茶公民館	眞薫結の会 かぎやで風サークル	当初生涯教育の一貫として、男かぎやで風サークル（男10名）で八足眞薫結の会仲程めぐみ師匠の指導のもと、週1回練習にはげんでいます。皆、初めての舞でしたが今では僕たちでも踊れるようになり、町内イベント等にも出演依頼があるときは参加しています。近年は女性会員も加入を認め、現在17名会員にサークル活動を楽しみ過ごしています。高齢者のため50歳代、60歳代の入会を希望しています。	17 人	3,000 円	これまで男性かぎやで風サークルで発足をし、今は女性の方も入会募っています。
		谷茶健康教室せんだんの会	私ども谷茶区では、ミニデイサービス、健康教室せんだんの会の名称で高齢者に声がけを行い、希望者を募り月2回第2月曜と第4月曜に当公民館に集い新城百合子体育指導員による顔の体操や合唱、ゲーム、ゆんたく会等をする居場所作りを目指しております。近所の介護施設より看護師が訪れて血圧測定をし、健康チェックのボランティアの協力も頂いています。毎回ごとにお茶菓子代として100円徴収し、年3回程度バスツアー（3、4時間程度）としてランチの会食会やドライブへ出かけたりも行っております。現在女性だけの会となっていますが、認知症予防のため、男性会員も募っております。	10 人	100 円	ひきこもりや孤独にならない為の抑止力。人と人とのつながりの大切さ。

	公民館名	事業名	主 旨	参加者数	参加費	なぜこの事業が「ユニーク」だと思いますか？
3	本部町立中央公民館	もとぶ半島カルスト講座	本部町山里から今帰仁村今泊にかけての地域は、国内でも例の少ない円錐カルスト地域として知られ沖縄海岸国定公園に指定されている。しかしながら、その貴重な自然景観については、町民においても漠然と語られることが多く、カルスト地域について理解し、町内外に正しく伝えられる人材は少ない。本講座は、本部半島カルスト地域の自然について正しく理解し、町民や来訪者に対するインタープリター（解説者）となる人材の育成を目的とする。	12 人 延 29 人	100 円 (保険代)	貴重な自然景観について正しく理解し、人材育成に繋げる機会を提供する。
		水墨画教室	サークル活動団体である水墨画サークルは、週一回の活動をととして「もとぶ展」への出展等を活発的に実施しており生涯学習の一環として定着してきているところである。今回、教室を開催するにあたり、基本書道で学ぶ運筆や線質を水墨画で生かすことを目的とする。	10 人 延 53 人	なし	既存で実施されているサークル団体の講師を当教室の講師として依頼し、芸術文化に触れる機会を拡大することで「もとぶ展」への出展意欲高揚を図る。
		パソコン講座	日本におけるパソコンの普及が9割を超えている状況であり、職場・家庭等ひいては実際生活に即する資材であることから、パソコン操作等の基本知識を習得し生活環境の向上を図ることを目的とする。	12 人 延 53 人	なし	継続的に実施しているパソコン講座であるが、ニーズが高く一般家庭でパソコンに触れる機会が少ない町民が多数存在する。
4	本部町立東地区公民館	ソーメン流し	夏休み小学生を中心に児童生徒が公民館駐車場に集まり、ラジオ体操をする。その最後に”がんばりました。”という意味で、大人の方にも手伝ってもらい、ソーメン流しをし、みんなでおいしくいただく。	50 人	0 円	子どもたちの頑張りを労うため、交流しながらみんなで流しソーメンをし、又、来年も頑張るってこの会に参加しようと思う気持ちが育つ事業だと思う。
		教育委員会主催の夏休み勉強会	本部町の生徒の学力を上げる為の勉強会。各公民館で月～金曜日、2時間、希望する生徒のみの参加。	40 人	0 円	町が一丸となって、子どもたちの学力向上にとりくんだ事業だと思うので。
5	東村中央公民館	英語の絵本読み聞かせ	村内小学生の英語への関心を高めるとともに、本を読む楽しさを知ってもらう。	20 人	無料	1 ページごとに英語の絵本を読んだ後、同じ内容の日本語の絵本を読むことで、英語に興味がない子でも抵抗なく、楽しく聞くことができる。
6	東村川田地区公民館	海神祭	農作物に感謝し毎年の豊穰を請い願う、収穫の感謝と豊年、並びに航海安全と豊漁の祈願の行事。	150 人 ほど	無料	
		学事奨励会・アプシバレー	人材育成を図る目的で幼児、児童生徒に軽スポーツをさせた後、PTA会員、部落役員並びに総務委員の運営で学事奨励会を行っている。畦の草を刈り取り、田畑の害虫や作物を海に流し遠くへ追い払う行事。近年は、自弁当で各班別に別れて集まり、酒を飲み交わし懇談や余興で懇親を深める。	150 人 ほど	無料	

	公民館名	事業名	主 旨	参加者数	参加費	なぜこの事業が「ユニーク」だと思いますか？
7	東村平良地区公民館	ほがらか会	高齢者の集いの場で体をうごかしたり、歌を歌ったり、モノづくり等をして老化を防ぎ、健康にすごしてもらう。	20 人	なし	
8	恩納村安富祖公民館	学習塾	地域の子どもの学力向上を推進する目的で教師 OB 及び学生 の協力により毎週月曜日午後 6 時 00 分から 7 時 30 分実施していま す。 平均 12 名ほどの出席です。		0 円	恩納村において夏休みの学習塾の取り組みはあるが、毎週取り組んでいるのは当区だけだと思う。また、年 2 回程度地域のお米で自分たちで作るオニギリ食事会もあります。
9	金武町立中央公民館	公民館公演事業（4 回）	中央公民館大ホールで公演事業を実施し、町民に対してさまざまな感性や意識の向上を図るとともに、施設の運営・活用方法についても意識改革を行う。	1,200 人	無料	事業主体が中央公民館となっているので、地域のニーズにあった事業展開をし、補助事業とは違い制限がない中で事業が出来るため、地域性が出せる。
10	宜野座村立中央公民館	男も料理教室	串刺し料理の材料である野菜・肉・魚貝などの下ごしらえから、揚げるまでの一連の技術を学び、試食しながら、現代の食生活等について語る。	10 人	1,000 円	日頃、料理に不慣れな男性が集まり、グループで協力しながら、積極的に調理に取り組んでいる点。
		バッティング教室	小学生を対象に、野球のバッティングの基礎から学ぶ。施設の打撃練習場を利用し、バッティングの向上を図る。	16 人	1,000 円	体育施設の打撃練習場を生かし、講座につなげることができた点。
		キッズフラ教室	フラダンスの基礎を学び、児童が楽しくフラダンスに慣れ親しむことを目的とする。	23 人	なし	大人のフラダンスがサークル化しており、違う世代にも広げていこうとする中で、実現した点。
11	宜野座地区事務所	豊年祭	無形文化財にも指定されているもので、伝統芸能や文化の発信となっている。区民全員が参加する一大イベントである。区内外からの観客も多い。（隔年開催）	1,500 人 (延べ)	0 円	二才団ブリーから始まり、出演者達は 2 週間で演目を演じ、当日は素晴らしい演技をみせてくれる所、老若男女全ての区民がかかわってくるから。
		豊水祭	豊年祭のない年に行う行事である。各団体力を合わせてやる。区の内外問わず参加できる。	500 人余	0 円	各団体のアイデアで食べ物を提供。（金券の半券でくじびきがあり豪華賞品が当たる）
		綱引き	わらから縄を編み、大綱を作り、区民は前組（メーグミ）、後組（クシグミ）に分かれて引き合う。区外の人参加も OK。大綱が作れる過程もよく分かる。綱引きの後は沖縄角力大会もある。	800 人		綱をわらからどのようにして作るかを目の当たりに見れる。
12	沖縄市立中央公民館	自治公民館講座事業	地域の自治公民館において、地域の学習ニーズに対応した講座を地域の自治公民館が講座を主体的に企画・運営することで、地域のニーズに対応した講座が開催できる。（備考:37 自治会が 3 回の講座をそれぞれ企画）	2,700 人 (延べ)		通常、講座は公立公民館などが、企画・運営するが、本事業は講座の支援は公民館が行うが、企画や運営等は地域の自治公民館が行う。

	公民館名	事業名	主 旨	参加者数	参加費	なぜこの事業が「ユニーク」だと思いますか？
13	嘉手納町中央公民館	三板教室	手軽に琉球文化を学ぶ。	96 人	0 円	地域住民の関心の高さ。
		健康酵素ジュース スムージー作り教室	野菜、果物を使い、酵素を損なわず作るスムージーで、 家族の 健康管理。	95 人	2,500 円	住民の関心の高さ。
		スマートフォン活用術教室	スマートフォン、タブレットを使いこなすとともに、 情報機器の危 険性や可能性についても理解を深める。	17 人		町支援の ITC ベンチャー企業を講師として招いた。
14	うるま市立公民館 (石川、与那城、勝連)	モデル自治公民館指定事業	うるま市立公民館は市内を 3 地区に分け、社会教育指 導員（非常勤）を配置し、その指導員が地区の自治会 へ赴き連携して自治公民館を活用した各種教室・講座 を実施する。	27 団体		社会教育指導員が講座教室の企画・実施の知識を地区の自治 会へ伝え広めていくことで独自で講座等の企画・実施出来る 団体や人材を育てる。
		マーラン船乗船体験	琉球王国時代からの交易の拠点として栄えていた平安 座島において、帆で風を受けて走る木造船「マーラン 船」が戦後初めて復元された。このマーラン船につい て学び実際に乗船することで先人達の知恵やその背景 を知る。	18 人	無料	2012 年から進められているうるま市の「マーラン等復元活用 事業」と連携し、うるま市でしか出来ないマーラン船の学習 や乗船体験を行える。
		すーじぐわ巡り	うるま市の島々のロマンを求めて伊計島、宮城島、浜比嘉島、 平安座島や各自治会内を巡りながら、その地の歴史、自然、 文化などを学ぶ。	13 人	無料	それぞれのすーじぐわを探索した。郷土の歴史を振り返り、 伝統文化を知ることであるさとの良さを自慢できる講座と なった。
15	読谷村文化センター	赤犬子子ども 三線・箏・太鼓クラブ	小学校 1 年生～中学校 3 年生までが対象。 約 1 年間、 沖縄の伝統芸能である三線・箏・太鼓を学び、地域文 化の継承、発展を図る。文化センター開館後 15 年以 上開催している事業であり、毎年 100 人以上の子供た ちが受講している。「読谷まつり」「子ども芸能祭」「さ んしんの日」など多くの成果発表の場があり、本セン ターを代表する事業である。	約 130 人	無料	100 人以上が子どもたちが約 1 年間伝統芸能を学ぶという事 業は県内でも珍しい事業だと思っており、読谷村の文化村作 りにおいて大きな役割を果たしていると考えている。
		やちむんを通した取り組み	返還軍用地跡地利用として沖縄の伝統工芸やちむん (陶芸) の窯元を招致した「やちむんの里」内に、生 涯学習施設として陶芸研修所がある。沖縄の伝統工芸 やちむん作りを通して物づくりの楽しさや喜びを感じ てもらうための体験教室を行っている。成果としては、 受講生だった方が、サークルを作り、今ではそのサー クルが講師となってやちむんの楽しさを教えている。	10～20 人	2,000 円	陶芸研修所という施設を活用し、小さな子供たち向けの教室 や、本格的に作成したい人向けなど様々な体験を行うことが できる。他市町村からの利用者も多数いる。
		サークル委託講座	文化センターで活動を行っているサークルに講師を委 託し、講座を行ってもらう。サークルが積極的に受講 者に関わることで日ごろ学んでいることを村民に還元 し、お互いのスキルの向上や親睦を深めることを目的 としている。講座終了後、受講生がそのままサークル に加入することも多い。	10～20 人	500 円～	講座の企画、運営をサークルが行うことでサークルの方のス キル向上につながる。そして受講者が受講後サークルに加入 することでサークル活動も活性化するため効果の高い事業で ある。

	公民館名	事業名	主 旨	参加者数	参加費	なぜこの事業が「ユニーク」だと思いますか？
16	北谷町 宇地原区公民館	田んぼ遊び体験	普段なかなか体験することのない田んぼへ入り、泥んこになって遊びを通し、田んぼがどういうものか親しみをもって理解を深める。	43 人	0	日頃は、泥んこの中に入ること自体、ダメだよとか怒られたりするようなことを、さあ楽しもうと提供する。
17	北谷町 栄口区公民館	子ども料理教室	子どもたちが、自分で作って食べるという食への自立。	20 人	100	自分で作れると嬉しい。楽しい。という食への興味と感性が自立に繋がる。
18	北谷町 宮城区公民館	カラーコーディネイト	日頃、服や装飾品など自分に合っているつもりで身につけたり、髪型や化粧品もしていますが自分の目や肌の色などを知ることで自分に合う色や髪型などが分かる。	26 人	500	テレビなどでカラーコーディネイトの番組等ありますが、直に先生の講義を受けることで疑問などに思っていることも聞ける。
19	北谷町 桑江区公民館	歴史講座	沖縄の歴史を学ぶ。座学・史跡巡りをする中で、沖縄がどのような返還を巡って今があるのかを知る。	30 人	入館料のみ発生	単にいわゆる歴史ものだけではなく、考古学的見地からみた琉球列島を学ぶことができる。
		トレッキング or ウォーキング講座	「歩く」ことの基礎を学び、健康体力の維持を図る。	30 人	昼食代のみ負担	人間の基礎的な動作「歩く」に絞り、身体に負担をかけない歩き方が学べる。それを基に場所を広げ、公園・山里の景色、人との触れ合いを楽しむことができる。
20	北谷町 上勢区公民館	ふれあい市場	高齢者の作った農作物を販売する。元気な高齢者を応援し、やる気を高め、生きがい作りにつなげる。多くの区民が、買い物に楽しみながら、区民交流の広場でゆんたくを楽しんでもらう。高齢者福祉に関わる人達の交流の場にするために、できるだけ多くの人をスタッフとして参加してもらおう。(自治会主催)	120 人	0	
21	北谷町 美浜区公民館	区民交流サロン みはまちゃん	すべての町民がそれぞれの立場で地域社会に貢献し、地域に支えられ、生きていくことに喜びを感じる北谷町を目指した「第7次北谷町高齢者保健福祉計画」の一環として美浜区ちゅらあいランドプランを立ち上げ、子どももシニアも男性も女性もみんなで作ろう地域の和・輪を合言葉に月1回地域の人々が集まって昼食を取りながら区民間の交流促進を図っている。(自治会主催)	90 人	200	
22	北中城村立中央公民館	夏休み！ 小学生かけっこ教室	楽しく体を動かすことを目的とし、体力アップやスポーツを好きになるきっかけづくりを応援する。	33 人	無料	正しいフォームで、かけっこが上達したい小学生を対象にしており、館内での開催が多い公民館事業の中で野外で行うため。
		大人のための おすすめ絵本の会	日頃、読み聞かせ活動を行っている各サークルの皆さんを講師に、大人になってから読む絵本の奥深さや絵本に込められた作家の思いを楽しみ、子育て世代の絵本選びをサポートする。	24 人	無料	大人になってから読む絵本の奥深さや絵本に込められた作家の思いを楽しみ、子育て世代の絵本選びをサポートする。
		初めてのフラダンス講座	フラを踊ることにより、心身ともに若々しく、素敵に年を重ねるためのきっかけづくりをします。	30 人	無料	フラダンスは心身ともに若々しく、素敵に年を重ねるためのきっかけづくりとなり、最高齢83歳の方もフラを楽しんでいます。

	公民館名	事業名	主 旨	参加者数	参加費	なぜこの事業が「ユニーク」だと思いますか？
23	西原町中央公民館	平和事業 (西原町平和月間) 戦争写真・パネル・遺品展 と平和月間講座	西原町では、6月は平和月間と位置づけし役場、図書館、公民館がそれぞれの立場で恒久平和のための取り組みをおこなっている。西原町(村)は、沖縄戦において激戦地であり、戦没率 46.9% という数値は県内 1 位であること、いまだ町内から遺骨、遺品が出土している現状を伝え、戦争の悲惨さから平和への道を考える。	来館者数 1,340 人 (延べ) 受講者 154 人 (延べ)	①入場無料 ②講座受講料無料	戦争の概要、壕跡、戦争体験談などをとおして、西原村(町)の戦争の実態を学ぶことができる。
		しまくとうば継承・推進事業 第 1 部子どもしまくとうば講座・うちなー芝居講座成果発表会 第 2 部劇団花道「あむとうぬしちや〜輝け老人パワー〜」	現在、日々の生活の中で「しまくとうば・うちなーぐち」を聞いたり話したりすることが少なくなっている。そこで「しまくとうば」で挨拶を交わし、日常会話ができるように独自の文化である「しまくとうば」を継承・推進する必要がある。しまくとうばの大切さを意識付け、復興にむけた取り組みに寄与することを目的とする。	入場者数 386 人	無料	西原ことば(西原むにー)を交え、歌遊び、手遊びなどからしまくとうばを学ぶ。また、うちなー芝居を鑑賞するだけでなく、演技にチャレンジしながらしまくとうばを学び、成果発表会で披露することで、しまくとうばの楽しみながら学べる。
		山原の自然と文化講座	沖縄が誇る山原の自然の現状と課題について、座学と巡検を行うことで、次世代にもこの豊かな自然を残す、守ることの大切さを学ぶ。	123 人 (延べ)	受講料： 無料 ※山原巡検の際： 昼食費のみ実費	山原の自然や文化を座学で学び、実際に山原の奥間川周辺の散策をして実体験をとおしてより深く山原の自然について学べる。
24	宜野湾市立中央公民館	みつばち観察教室	みつばちの生態やみつが出来るまでの不思議を学ぼう！をテーマに小学生親子を対象に開催。みつばちの生態についての座学と巣箱やはちみつを採取するために使う道具(遠心分離機)を使って採取し試食を体験し、ガラス越しにはありますが女王蜂をみることもできました。	50 人	0 円	みつばちの生態については日常生活において貴重な体験であり、できたてのはちみつを採取して食すること。はちみつが出来るまでの作り手の苦労やキャリア(仕事)について学ぶ。参加の応募も 15 組(親子)に 82 組あり、関心度の高さが伺えた事業でありました。
		ネイチャーゲームで自然体験	「ゲームしながら楽しく自然について学ぼう！自由研究や工作の宿題も役立つよ！」をテーマに環境問題への気づきのきっかけをつくり、見方を変えて自然体験を学んでもらいました。	40 人	0 円	ゲーム感覚で体験しながら気づきを覚える。勉強とは違う体験で自然体験を学ぶ。
25	浦添市立中央公民館	大人のための食育講座～食べ物と環境を考える～	日頃の食生活から地域の食べ物や環境に関心を持つ。 ①沖縄の地産地消を考える ②フードマイレージを知る ③浦添の桑の実でジャム作り ④浦添のアーサでそば作り ⑤カーミージャーでアーサ採り。	20 人	800 円	世界の食料の状況や環境、労働の状況等を踏まえつつ、地産地消について学び、地域の資源を生かした全 5 回の連続講座で、参加者へ援農の試み、6 次産業や女性起業等、様々な学びを提供することができた。また、地域の新しい産業の PR にもなり、雇用促進や地域支援につながっていく可能性のある講座であると考えたため。

	公民館名	事業名	主 旨	参加者数	参加費	なぜこの事業が「ユニーク」だと思いますか？
25	浦添市立中央公民館	夏休みお仕事体験講座	店長になったつもりで売り方を学び、作ったお菓子を分館子どもフェスタで販売する。①流行っているお店、流行っていないお店について、意見を出し合う。(グループワーク) ②グループで店名を決めてポスター作り。売上金はどうするか考える。③クッキー、カップケーキの製作とラッピング。④子どもフェスタにて対面販売。⑤売上金の分配について決める。	15 人	600 円	自分たちで、流行るお店を立ち上げることから始まり、実際に販売するお菓子の製作、そして実際に販売、収益をどう活用するかを子どもたち自身が考え、体験し、参加した子どもたちがよのなかの商売の流れを疑似体験することができた。(全5回の連続講座) 企業は社会へ還元することも必要であることも、学び、いろいろ悩みながらも売上金を社会福祉協議会へ寄付を行うことで意見がまとまり、子どもたちの成長につながったと考えるため。
		自治公民館講座	地域住民が身近でもっとも利用しやすい自治公民館で、地域の課題や住民の学習要求に応じた講座を開設し、地域住民の学習意欲を高め、自治意識を育てるとともに、市民力・地域力を培うことを目的とする。※各自治公民館で、4～5回程度、様々な講座をおこなっており、講師多数のため未記入。 ※2月に実施する可能性があるので、参加者数は12月10日現在の人数であり、未確定。 ※講座によって、材料費を徴収している講座あり。	873 人		それぞれの地域の課題や住民のニーズに合わせた講座を、地域の方が運営委員となって運営を行って講座を進めている。市民力・地域力を高め、地域の活性化につなげることができると考えるため。
26	那覇市中央公民館	成人講座 「琉球の歴史と民族」	「琉球は、かつて武器のない平和な島だった」という。戦後70周年を迎え、近世・現代における沖縄の歴史について、学習する機会とする。	300 人	0 円	ふつうの通俗的な文化講演ではなく、大学や行政専門機関の研究者が、「古文書」や「文献史料」をもとに受講者向けに具体的に解説し、内容を読み解きながら進める。市民を対象に本格的な内容の講座となった。
		親子ふれあい教室 『自然体験！国際通りで川めぐり』	「よい子はここで遊ばない」の看板が都市の無表情な水辺を形作っている。今回、身近な川の大きな自然を活かすとともに地域密着型の環境学習を通して親子のコミュニケーションを深める機会とする。	29 人	0 円	講師に専門家ばかりではなく、地域の人材を招き、地域の河川情報を提供できた点がユニークである。
		読み聞かせ養成講座	子どもたちが絵本の魅力を知り、豊かな感性が育つように、絵本の読み聞かせについて基礎から学び、家庭での読書環境づくりや学校・地域での読み聞かせ活動への参加を促すことを目的に開催します。	131 人	0 円	中央公民館では初心者向けの講座を開催しているが、修了者には次なるステップとして中央図書館主催の中級読み聞かせ講座を受講できるよう、公民館・図書館・子どもの本研究会が連携して講座を開催していること。
27	那覇市小緑南公民館	小緑地区市民大運動会	21世紀を担う健やかな青少年を育てることを目的に、小緑地区に関わる期間・団体が協力し、豊かで明るく住みよい地域づくりをめざして、“うるく地域づくり連絡協議会”が平成8年に結成されました。以来、これまで消滅状態にあった各自治会対抗の小緑地区市民大運動会の復活をさせ、今年度で20回目の節目を迎えました。小緑南公民館もその事務局を担っており、またその地域の文化継承や教育力の向上と活性化を目指す事は公民館の大きな役割です。当該運動会は、沖縄の健康・長寿復活が大きなテーマの中運動会に参加することで、住民の健康意識の高揚や地域の健康づくりへ推進等、生活課題の解決に向け取り組んでいる事業です。	5,000 人	0 円	地域をより良いものにしていこうとする活動はすべて公民館活動であり、まちづくり協議会の活動はすべて公民館活動である。主役は地域住民、当公民館は支援の立場で運動会の主催する「うるく地域づくり連絡協議会」をサポートを行っているため。

	公民館名	事業名	主 旨	参加者数	参加費	なぜこの事業が「ユニーク」だと思いますか？
28	那覇市首里公民館	学社連携事業	学校現場では、「生きる力」の育成を目指して、教科の枠を超えた学習ができる「総合的な学習」に力を入れている。城西小学校3年生の「総合的な学習の時間」として、また、首里公民館の学社連携（融合）事業として、公民館でサークル活動をしている講師、会員に指導を依頼及び場所の提供を行い、その成果を公民館まつりで発表する。	140 人	0 円	市内の他の公民館では同様な講座が実施されておらず、さらに今年度で15回目になるため。
		守礼大学 首里の石碑めぐり	首里には首里城がある所以で、地域に史跡や旧跡などが多く存在している。そして、それらを講座に取り込むことによって、琉球史や琉球文化を広く市民に知ってもらおう。さらに、地域から講師を発掘し、生の声を講座に反映させる狙いがある。	120 人	500 円	毎回、座学後、首里地域を散策しながら学習効果を高められるのは、首里に公民館があるため利便性が高く、さらに首里地域を研究なさっている方々がおり、講師への登用が可能である。
		農作業体験講座 親子で畑人 さつまいもを育てよう！	都市化の進んだ那覇市に住む児童は、簡単に土に触れる環境があまりない。また、農作物を植えて収穫し、最後は調理して自分で食べるという経験をする子は、更に少なくなってしまう。そこで、保護者と一緒になって貴重な体験を味わうのが、この講座の主旨である。	26 人	2,000 円	市内の公民館で10組の親子が、唐芋を栽培できる規模の畑を有しているのは、当館だけであり、さらに講師は地域の方々である。地域と公民館の機能を有効に活用している講座だと思う。
29	那覇市若狭公民館	朝食会	毎月一回、おかず一品持ち寄り「朝食会」を実施している。「朝食会」は、青年層を対象とした公民館の新たな活用方法について考えるワークショップで提案され、以降毎月一回開催され、2016年1月に100回目を迎えた。「頑張らない」をモットーに、食を囲みながら世代や属性を超えて誰でも参加できるゆるやかな交流の場をつくっている。様々な出会いからイベント企画などにもつながっており「100人でだるまさんがころんだ」などのユニークな事業も生まれている。最近では、家族での参加者も増え、子育て情報の場にもなっている。	1～80 人	100 円	特定のテーマを設けず、また「頑張らない」というコンセプトが従来の公民館事業のスタイルとは異なっている点。また、そのゆるさが新たなコミュニティづくりにもつながっており、参加者が主体的に運営することで魅力ある場となっている。
		ナイトウォーク	ナイトウォークは、那覇中学校、上山中学校生徒を対象に、本島南部32kmのコースを一晩かけて歩く事業で、毎年3月に実施している。この事業は、非日常的な体験の中でお互いを励まし合い、助け合いながら、ゴールを目指すことにより、連帯感、達成感、充実感を共有し、困難に立ち向かい気力を培う機会を設け、青少年の健全育成を図ることを目的としている。もともとは、戦後50周年を機に、戦争の追体験を目的として始まったもので、当初は、国道58号線を北上するコースだったが、その後コース変更や小学生も参加できるデイウォークなどを経て、9年ほど前から現在のナイトウォークになった。	50～60 人	1,000 円	以前は、様々な地域や機関でナイトウォークを実施していたようだが、20回以上も継続しているところは少ない。対象は、公民館エリアにある二つの中学校生徒だが、運営には地域の方々や関係職員、ウォーキング協会や医療法人など、多くのボランティアスタッフが関わっている。ボランティアスタッフの中には、中学生の頃に参加した経験がある人もいる。

	公民館名	事業名	主 旨	参加者数	参加費	なぜこの事業が「ユニーク」だと思いますか？
29	那覇市若狭公民館	わかさ妖怪さんぽ	沖縄に伝わる「マジモン」に関するレクチャーと若狭公民館近隣地域にある「マジモン」伝承ゆかりの地を散歩形式で廻る講座。地域の伝承を学び、自分たちの住む場所について愛着を持ってもらうことを目的としている。 親子対象に、創作紙芝居や「マジモン」をイメージしたイラスト作成などを取り入れて実施したほか、対象を成人に限定した夜の講座なども実施した。伝承の背景にある地域の歴史や文化の掘り起こしを行い、将来的には、それを地域づくりに繋げていきたい。	15～30人	100円 (保険料)	「マジモン（妖怪）」を切り口に地域の歴史や文化の掘り起こしを行っているところ。 また、講話だけではなく、まち歩き、紙芝居、イラスト講座など、多様な手法を用いているところ。
30	那覇市繁多川公民館	あたいぐわープロジェクト	沖縄在来種の青ヒゲ・高アンダーを地域の人々が栽培・普及し「昔の繁多川豆腐」を再現する中で住民間のコミュニケーションの場・機会を広げ地域のさらなる活性化・まちづくりの一助とする。	約1,800人	0円	地域文化を活かし、住民が先生となり子ども達が誇りを持てる取組として高まっている所がユニーク。また年間1,800名ほどの生徒や地域住民が参加し持続的に行える仕組みができている。
		キバナノヒメユリ里親プロジェクト	「キバナノヒメユリ」という身近な自然を活かしながら自然観察や実習を通して自然保全に努め、コミュニケーション・連携の活発化から住民参画や市民性教育を推進する。その中で持続可能な経済活動を考える材料とし、地域の誇れる花として活性化につなげる。	186人	0円	野生では近い将来絶滅するといわれる絶滅危惧種1A類の植物を地域住民で里親として守り育てながら、自生地保全の取り組みがユニーク。学校の環境居育やバイオ培養研究所、遺伝子研究、行政など多様な関りで持続可能な地域社会を目指している。
		進学支援サポート下宿事業	沖縄県は東西約1,000km、南北約400kmの広大な海域に点在する160の島々からなり有人の離島39島のうち35島で高校がない。進学のため遠く離れた那覇市や最寄りの高校へは高い渡航費や教育費(平均81,000円/月)や身近に頼れる大人の不在が課題となっている。離島・遠隔地出身の学生に高齢者宅の空き部屋を提供することで、学生の金銭的負担軽減と高齢者の生活支援を両立させる。各世代の強みを活かし相互支援を実現し、都市と離島等が持続的な地域ビジネス(雇用・担い手)を生み出す地域を創出する。プロジェクトエリアの沖縄県那覇市繁多川も高齢化率が29.1%であり、自治会加入率は20%。孤立化した高齢者の増加が深刻だ。主な仕事内容は、那覇と離島を含む遠隔地の資源を相互に補い合う交流を創出し、若者と高齢者の相互支援のマッチングをコーディネートする。	6人	2,000円	独居高齢者支援と高校や大学の進学支援という課題を掛け合わせ、地域の魅力へと変換した。現代にあった地域で支え支えられるしるみを構築する。

	公民館名	事業名	主 旨	参加者数	参加費	なぜこの事業が「ユニーク」だと思いますか？
31	那覇市牧志駅前 ほしぞら公民館	星空案内人養成講座	学校や公民館等での星空観望会で星空を案内したり、友人や家族など身近な人と星空を楽しむ人材を育成するため。	90 人	150 人	県内でこの講座を開催しているのは当館のみで、類似の事業も石垣市に 1 件あるだけである。
		宇宙の学校	J A X A、KU-MA（子ども・未来・宇宙の会）と共催で、小学校低学 年の親子を対象に、親子で科学実験や工作に取り組むことで、ものづくり、科学する心を育成するとともに、親子のつながりを強化する。公民館はスクーリングととらえ、工作や実験の大部分は家庭で親子でおこなうのがこの事業の特徴である。	150 人	2,000 円	J A X A、KU-MA の作成した優れた教材を使用し、そのほとんどを家庭でおこなうようになっている。公民館では家庭でできない大規模な実験をする場。家庭学習テキストは 30 種類以上あり、親が手伝わない部分を設定してある。工作教室はこれまでも多数あるが、教材の質の高さと家庭学習を中心にしたこと、親子のふれあいを重視したところがユニークだと考える。
		親子星空教室	久茂地公民館時代から 40 年近く続いている講座。小学校高学年の親子向けに、宇宙や星空についての学習をおこなう。思春期入口の時期に親子で一緒に学習する時間を作ることで、単に宇宙のことを学ぶだけでなく、より良い親子関係を構築する一助とする。	50 人	0 円	県内の他公民館、博物館では当館のような連続講座は開催されていない。
32	南城市中央公民館	うちなーぐち教室	うちなーぐち普及を目的に比嘉光龍を講師に一般的なうちなーぐちに始まり、発音や敬語、地域での言葉の違い等、とても幅広い内容で実施。毎水の 6 月 3 日～7 月 1 日まで計 5 回実施	40 人	0 円	他県にはない取組。
		かぎやで風教室	一般講座の文化的事業ということで、沖縄文化芸能でかかせないかぎやで風を普及目的に実施。11 月 24 日、12 月 1 日、12 月 8 日 計 3 回	48 人	0 円	沖縄の文化・芸能に触れる機会の提供。
		久高島史跡めぐり	神の島といわれる久高島は、琉球発祥の地として最も神聖な島を歩き、文化財に触れて学習することで地域文化の理解を深める。	25 人	1,370 円 (フェリー代)	沖縄で最も神聖な島を歩き、文化財学習を実施。
33	与那原町コミュニティー センター	夏休み朝活応援隊	児童、生徒の夏休みの宿題を応援するために、朝 8：30～昼 12：00 まで町コミュニティーセンターの自習スペースのクーラーをつけ、学習しやすい環境を提供し、夏休みに崩れがちな生活リズムを整えることを目的としている。	404 人	0 円	事前申し込みなどはせず、参加するしないは各自に任せている点。
		たのしい科学&実験講座	座学メインではなく、体験を中心とした内容で、五感を使って考え、楽しみ、科学に興味を持ってもらうことを目的としている。	80 人	各 150 円	体験重視の内容となっている。ドライアイスを使っのアイスクリーム作りや、目に見えない空気の粒を専用の道具を使ってわかりやすく子ども達に教えている点。

	公民館名	事業名	主 旨	参加者数	参加費	なぜこの事業が「ユニーク」だと思いますか？
33	与那原町コミュニティーセンター	避難訓練	災害時に適切で迅速な対応ができるように、職員だけでなく利用団体会員にも参加をしてもらい、防火・防災意識の向上を図ることを目的としている。	20 人	0 円	これまで職員のみで行ってきた訓練を、利用団体会員を巻き込んで行うことで、より本格的な訓練が行える点。
34	南風原町立中央公民館	南風原ふるさと発見ウォーク	史跡等をめぐり、まちの良さを発見し、まちへの愛着心を育み、地域住民が参加することで地域の絆づくり、まちを歩くことで健康づくりを目的に開催。	129 人	無料	社会教育団体等が協力連携し、開催され、参加者に喜ばれたため。(社会教育委員会、女性会、青年会)
35	南風原町津嘉山区自治会	綱引き	「御願綱」又は「アミシの御願」として昔は五穀豊穡を祈り、悪疫払いなどをしたが、今は区民の交通安全、繁栄を祈る行事になってきており、東西に分かれて綱を引きます。	700 人	0 円	約 650 年前から続く伝統文化であり、区民が 1 番多く参加する。
		区民運動会	区民が一堂に集まり協議や演技に参加することによって区民の団結と親睦が深まる。	500 人	0 円	スポーツ、ゲームや踊り、参加者も園児、小学生、青年会、女性の会、婦人会と参加者も多い。
		夏まつり	青年会、女性の会が中心となり、3 世代園児から老人までが参加し、踊りや出店で盛り上がる。	400 人		家族連れが多く参加し 3 世代交流になる。
36	八重瀬町中央公民館	八重瀬町中央公民館講座「文学碑めぐり講座」	県内にある琉歌碑等を訪ね、沖縄独特の情緒的な短詩形式である琉歌（8, 8, 8, 8, 6 音形式）を学習するとともに、郷土の文学や文化に対する理解を深め、町民の文化教養の向上と郷土特有の文化に誇りを持ってもらうことを目的とする。	40 人	3,600 円	合併以前から続いている講座です。平成 2 年から始まっています。県内を南部、中部、北部コースに分けて、各コースをまわっています。
37	糸満市生涯学習支援センター	リズム健康体操	聴き慣れた曲に合わせて無理なく、楽しく体を動かせるので日頃運動をししない方でも喜んでできるのではないかと講座を行いました。	15 人	0 円	参加者が 65 歳以上で昭和の歌に合わせて楽しく無理なく体操しているところ。
		南山王国の歴史散歩	地域に南山時代の歴史を研究している方がいて、講座を開いてほしいと地域の人の要望があり開設した。関心は年々深まり受講者も増えてきている。	28 人	0 円	講座を 3 回行っているが毎年参加者が増えている。
		琉球料理と御願	琉球料理の基本的な作り方を知ってもらおうと琉球料理研究家の渡口初美氏を講師にすると受講生がたくさん集まると思い招へいた。また、料理を煮ている間の時間を利用して御願の由来と屋敷の御願等自分のできる御願のやり方についても講話してもらいました。大好評で来年もやりたい意見が多かった。	15 人	1,000 円	琉球料理と御願の組合せは、なかなかないと思う。また、料理や御願の由来についても知っていることで、郷土への関心も高まっていると思う。

	公民館名	事業名	主 旨	参加者数	参加費	なぜこの事業が「ユニーク」だと思いますか？
38	栗国村中央公民館	染色教室	村木であるフクギを利用した染色を館長の本業が染色家であることから自動を中心に行った。	20 人	0 円	栗国村の村木であるフクギやふだん食べている玉ねぎなどの利用方法を紹介した点。
		フクギと中国風水	村木でありながら身近にありすぎてあまり考えることのないフクギについて深く勉強する。	20 人	0 円	フクギのもつ役割や利活用について学べたこと。
		男の料理教室	島に居ても入手できる食材を使い、一人暮らしの男性にも簡単に作れる料理を学ぶ。包丁や調理器具の使い方に慣れてもらう。	延べ 100 人	1 回 500 円	男の料理教室でありながら女性の参加も可能。料理をしながら交流の場でもある。
39	伊江村中央公民館	バキ作り教室	村内にある廃品（プラスチックバンド）を使い昔ながらの手法での籠作り。	28 人	無料	昔は竹を使い編まれていた籠を、地域にある廃棄する材料を使い竹の代わりとすることにより、リサイクルし、僅かではあるが廃棄物を減少できる。
40	伊是名村 産業支援センター	生涯学習発表会	人材こそ「村おこし」の原点）資源の乏しい、本村にとっては正に「人材を持って資源となす」を村民が等しく認識しています。地域住民や子どもたちが日頃より取り組んでいる自発的な意思による学習等を発表する機会を設け、今後の生涯学習・地域の教育力等の向上を図ると共に支援につとめる。 ※生涯学習発表会は、保育園・幼小中・各子ども会・老人会・村民等が集い、日頃より取り組んでいる学習・創作や習い事など1年間学習したことを発表する場となっております。	250 人	無し	村民全てが対象で創作品の展示紹介やパネルによる紹介などがあり、特殊な物はシャコ貝の養殖・もずく養殖方法の紹介など多彩でユニークだと思います。
41	伊平屋村 離島振興総合センター	ファミリー読書（読み聞かせ）	毎月第3日曜日に、子ども会育成会による読み聞かせをおこない、読書活動のきっかけを作る。	167 人	0 円	保護者による読み聞かせ活動を地域で行う。
		伝統文化学習講座	地域の人材を活用し、伝統的な舞踊や三線、料理などの講座を毎月第3水曜日に開催	167 人	0 円	失われつつある伝統的な技術を地域の大人から子どもへ継承する機会となる。
		てるしの塾	塾のない本村の中学3年生を対象に、学習塾と提携して受検対策等の学習支援を行う。	22 人	1,000 円	昨年度までは島内の人材を活用していたが、受験という大きな節目に万全の体制で臨むべく初めて外部から専門講師を招聘して行う。
42	宮古島市下崎地区公民館	筋トレ（ストレッチ）講座	ストレッチ運動で体をリフレッシュし、日々の生活を楽しく過ごす。	37 人	0 円	健康ブームなのか、すぐに募集定員（20 名が 37 名）達し、他の地域からの参加も多く講師の人気を実感。

	公民館名	事業名	主 旨	参加者数	参加費	なぜこの事業が「ユニーク」だと思いますか？
43	宮古島市下地公民館	タケアラ学校講座	健康で心豊かな生きがいのある人生を送るため、時代に応じた新しい知識を身に付けると共に趣味や仲間づくりを通して、楽しい学習を行う。	30 人	0 円	月 1 回（年 8 回）の講座で、60 歳以上の方が対象。1 年の計画を皆で話し合いで決める。地元（下地）、あるいは宮古島に住みながら普段足を運ばない施設の見学や、伝統芸術の工程作業を学ぶ事で改めて島の文化の良さを理解することが出来る。
44	宮古島市久松地区公民館	琉球舞踊講座	琉球舞踊の基本を学び、芸を身に付けると共に心身を豊かにする。	20 人	0 円	当初、集落の婦人たちが 20:00 から始まる講座に集まのか心配していたが、すぐに定員に達し、参加延べ人数も 200 人を超えた。あらためて、宮古の女性の踊り、音楽好きな事やライフスタイル変化を感じられたから。郷土芸能根強い人気実感。
45	宮古島市城辺公民館	平成 27 年度新潟県上越市板倉区宮古島市城辺地区児童交流事業	1893 年宮古島の人頭税廃止に尽力した中村十作しを縁として、夏冬相互のホームステイ交流を通じて両地域を結ぶ歴史を学び、風俗や文化の違いなどを体験する心を持った児童を育てるとともに、両地域の一層の親善を深める。	4 人	0 円	
		平成 27 年度「旬の食材で楽しくクッキング講座」	親子で楽しく伝承料理を学び、地元を愛する心を育む。	10 人	1,000 円	
		平成 27 年度「月桃・あだんで物作り講座」	月桃・アダン葉を使って、物づくり。昔ながらの民具を作り、楽しさを知る。	10 人	1,500 円以上	
46	宮古島市西原地区公民館	初心者への為の優しい三線講座	始め位の三線にチャレンジする方に三線のノウハウを解かりやすく教え、優しい曲にも挑戦します。	20 人	0 円	受講生が 10 代から 60 代と年齢幅が広く、西原地区以外からの参加もある。また、受講後すぐにサークルを立ち上げ活動している。サークルは、11 月の市の生涯学習フェスティバルにもサークルで参加。親子での参加もあった。
47	宮古島市中央公民館	花づくり講座	挿し木から始めるブーゲンビレア、土作りや施肥、育て方を学び生活の潤いに役立て、クロトンの種類や楽しみ方について学ぶ。	30 人	0 円	月 1 の講座だが、植物の生育を 7 か月の長期にわたり観察できるので、新たな発見が生まれる可能性があり、期間内においては講師の助言、指導も仰ぐことができる。
		大工講座「D I Y にチャレンジ」	土地利用図を見ながら土地や建物に関する法律も学び、ブロックやモルタル等を使って階段を造る実技も体験する。	20 人	0 円	大工からの指導だけではなく、1 級建築士から建築法なども法規も学べること。また、公民館敷地内で戸棚の修繕や階段作りの実技も行うことによって、公民館に対する愛着も生まれる可能性がある。
		紅型講座	沖縄古来の紅型の基礎知識を学び、自分の好きな作品を作る。	20 人	0 円	宮古上布という同じ工芸品（無形文化財）がある宮古において、一般市民が他の工芸品の制作に触れる機会が少ないので、良い比較の場になったと思います。

	公民館名	事業名	主 旨	参加者数	参加費	なぜこの事業が「ユニーク」だと思いますか？
48	多良間村 コミュニティ施設	コミュニティまつり	明るい村づくり、人づくりをめざすコミュニティ施設の役割について地域住民の理解と関心を深め、生涯学習活動への意欲を促し、教育文化活動を推進し、生涯学習施設としての今後一層の活性化を図る。	134 人	0 円	水納フツ・多良間フツ・宮古島方言を交えた教訓話は、歌あり、踊りあり笑いあり等で子どもからオジー、オーバーまで参加者全員が楽しいひと時が過ごせたから。
49	与那国町 自治公民館連絡協議会	伝統祭事	年間 40 以上の祭事行事を執り行う。			
			祭事のみを執り行う。			
			祭事のみを執り行う。			

座談会

「公民館のいままでとこれから

～利用者インタビューからみえてきた、公民館のすがた」

——『公民館を活用した芸術文化発信事業』では、沖縄県内の公民館を対象としたアンケート調査にくわえ、サークル等で公民館を利用する利用者にインタビューを実施しました。利用者インタビューを通して、地域における公民館の存在感とその役割が浮かび上がってきます。

インタビュー調査を担当した平良亜弥と鳥越一枝、そして本事業の実施主体である特定非営利活動法人地域サポートわかさ理事の宮城潤、公益社団法人全国公民館連合会事務局次長で機関紙『月刊 公民館』の編集人を務める村上英己を交えた四者による座談会を開きました。

本座談会では、利用者の目からみた公民館像をもとに、これからの公民館のあり方について対話を重ねました。

－利用者インタビューにみる公民館の存在感

平良亜弥（以下、平良）：沖縄本島の北部、中部、南部、那覇地区、そして宮古地区の14の公民館とそこを利用している23の団体にインタビューをしました。全体的にはシニアの利用者の方が多いのですが、20代30代の方にもお話を伺うことができました。みなさんのサークル活動に対する想いを聞いたことは貴重な経験になりました。

鳥越一枝（以下、鳥越）：サークルは、各公民館から推薦してもらいました。公民館や自治体の文化事業としてスタートした取り組みがサークル立ち上げの契機になっているものが半分、自主的に立ち上げたものが半分ぐらいです。

どのサークルも、活動や郷土への強い情熱が感じられまし、自分たちのやっていることが地域を活性化していくことにつながっているという思いをもって活動しておられることがわかりました。

平良：『エヴァダンスア与儀』というバトントワリング・ダンスのサークルは、壺屋小学校の「放課後子ども教室」に通っていた子どもたちとその保護者が中心となって、那覇市中央公民館にサークルを立ち上げました。壺屋という都心部にあって、児童数が少なく小学校に運動部が少ない。そこで、保護者と子どもたちがサークル活動を始めたそうです。児童数の減少によって学校で部活動ができなくなるということは各地で起こっていると思いますが、公民館のサークル活動が学校でできない部活動の役割も担うようになっているのかもしれない。

鳥越：今帰仁村中央公民館で長年活動している『なきじん民踊風車』の諸喜田スエ子さんのお話には歴史の重みを感じられました。昭和47年にあった復帰記念沖縄特別国民体育大会「若夏国体」のとき婦人会に集団演舞の要請があり、各村落からメンバーを募って参加したそうです。これまで40年近く活動してきましたが、現在は次のリーダー育成に取り組んでいます。次世代というのは50歳代です。こういった活動をやっていく地域の人が増えることが地域を豊かにしていくという信念が彼女の活動を支えていました。

村上英己（以下、村上）：インタビューを読んで、それぞれのサークルが公民館に対する思い入れをもって活動しているということがよくわかりました。公民館は安く使えるとか、利便性がいいといった実利的な面もあるでしょうが、公的な施設だということの安心感もあると思います。公民館側からの協力や情報提供といったことがサークル活動の継続や発展にも影響すると思います。表現したい、誰かにみてもらいたいということがモチベーションになりますし、発表の機会があることもサークル継続の大きな理由だと思います。

平良：北中城村立中央公民館で活動するサークル『ストリートダンス WINGS』代表の島崎琴羽さんにお話を伺ったところ、公民館まつりでの発表機会だけではなく生涯学習課が他のイベントを紹介してくれて、子どもたちのダンスを地域の方々に見てもらう機会が増え、子どもたちのやる気やレベルアップにつながっているとおっしゃっていました。お話を伺うなかで、公民館と利用者との協力体制が重要だと感じました。

鳥越：浦添市中央公民館で活動している『浦添ゆいゆいキッズシアター』は、浦添市の文化事業がスタートとなっています。演劇をやることもさることながら、人材育成に注力している点が特徴的でした。子どもの居場所づくりだったり、表現を通して生きる力を育むこと、もちろん将来的には演劇のプロを目指すというキャリアの観点もあります。浦添市の文化課の方が、苦しいときにここにきて大声出して、演劇で得たことを思い出して欲しいと言っていたのが印象に残っています。

平良：『創作エイサー団体那覇太鼓』の与那覇仁さんのように、自主的な活動から公民館の活動に対して関心を寄せていく方もいます。与那覇さんは、沖縄の文化を伝えたいといろんな活動をされており、エイサーもそのひとつとして活動しておられるようです。あるとき、知的と身体の障がいをもった方がメンバーに参加したことから、エイサーの取り組みに変化がみえてきたと言います。このサークルの特徴は、自分たちで振り付けを考え、みんなでお互いに教えあうというところにあるそうですが、振りを教えあうときに、障がいのある子には他の子と同じように教えても教えられない、伝わらないというので、子どもたち自身でどうすればよいか考える場面が出てきたんだそう。そのやりとりをみていた大人たちも子どもたちの姿に考えさせられ、それで子どもの健全育成に目をむけるようになったと言います。

29歳になったという彼は、小禄南公民館の利用団体連絡協議会会長もしていて、公民館に新規利用者を増やしていきたいという希望をもっています。新規利用者に増えてもらいたい反面、利用者が増えすぎると自分たちの使える時間が限られてしまうかもしれないというジレンマを抱えながら、どうすればいいかと悩んでおられました。空いている時間を活用する方法など、利用者自らが深く公民館のあり方について考えておられる姿に驚きましたし、頼もしく感じました。

—問われるコーディネート能力

宮城潤（以下、宮城）：那覇市小禄南公民館の那覇太鼓の例は、サークルが社会の多様性を学ぶ場にもなっているということだと思います。サークル活動で経験したことを学びにして、地域に還元しようとしています。

インタビューからも読み取れるし、サークル活動の流れをみていてもわかるように自治会、婦人会、青年会といった地域団体と密接にかかわっている人がサークル活動にもかかわっている例は多くみられます。同時に、地域や地縁の組織で集まっているのではなく、テーマ型の趣味的なコミュニティもあります。そういった多様な背景をもったサークル同士が、公民館を通してお互いに相談しあえる関係ができないかと考えています。公民館でサークル活動を行う意味はそういうところにあるのではないのでしょうか。サークル活動をする方々にもコミュニティや仲間づくりという意識をもってもらいたいし、自分たちの活動がどのように社会につながっているのかを考えてもらいたい。サークル同士が互いに別々に存在しているんじゃなくて、うまくつながっていければ、幅広く豊かなものになっていく。それらをどうすればうまくつながられるか、そこが課題です。

平良：公民館とサークルの関係性はインタビューで聞くことができたのですが、サークル同士の関わりというのはあまり聞けませんでした。ですが、地域で活動する者同士が公民館で顔を合わせることで、ささやかなことだけれどそういう関係が生まれるのが公民館の特徴だというお話を宮古島市中央公民館の利用者さんから伺うことができました。

村上：サークルを続けるモチベーションはなにか、公民館で活動する意味はなんなのかを、インタビューを読みながら考えていました。

たしかに、公民館を安く利用できるのは理由として大きいでしょう。では、公民館が安く利用できるのはなぜか。利用者のみなさまにその意味を考えてもらうことも大切ですし、公民館も伝える努力をしていかなければなりません。そうしなければ公民館は単なる安上がりの部屋貸し場に成り下がってしまいます。サークル発表の場を公民館が斡旋したり、つくったりするのは、利用者にとってもありがたいことだと思います。自己実現の場となったり、達成感を得られる機会になったりして、そのことがサークルを続けるモチベーションにもつながってくると思います。こういった活動は社会貢献とか社会還元につながりますので、それがひいては公民館で活動する意味につながっていくのではないのでしょうか。

宮城：公民館職員のコーディネート能力が問われているのだと思います。利用者に、安く使えるのは税金だから社会還元してくれという、どうしても窮屈になってしまいます。たとえば、老人福祉施設に慰問活動をしているサークルがあるように、公民館の側が地域のニーズを把握して、必要とされる場所にうまくつなげていく。毎週慰問に行ってくださいと言われると負担ですが、それが年数回なら無理なくできると思いますし、感謝されたり喜ばれるとモチベーションにもつながります。

—これからの公民館のすがた

宮城：広域をカバーする都市部では、公民館を日常的に利用する人は住民の数パーセント程度だと言われています。公民館の存在を知っていても来たことがない、公民館でなにが行われているのかわからないと言う人はたくさんいます。本来的に居場所を必要としていても、うまく場とつながれない人たちもいます。多様な人たちが足を運べる場になればいい。正直、いまは偏りがあると思います。

公民館の本来的な機能それは、地域課題や生活課題に対して、お互いに学びあいながら活動を通して解決していくということです。現状は、その課題さえも限定的にとらえられているように思います。

今回のサークル利用者のインタビューは、たくさんの課題解決に向けたヒントがつまっています。生きがいつくりや居場所づくりのほか、子どもと大人、障がいをもった人たちといった多様な人をつなぐ結節点にもなっている。そういった実際に起こっていることを自覚していければ、もっと公民館の存在が生きてくると思います。

県内の公民館が連携、共有しながら取り組むことによって、それぞれの活動がイキイキと輝き出し「沖縄の公民館はおもしろいよ」と言われるようになればと願ってこの事業をやっています。

村上：沖縄は、生活困窮世帯が多いという報道をよく目にします。公民館はビジネスではアクセスしづらい層に対して、他の行政部署とは異なる方法でコミットできるポテンシャルの高さを持っています。公民館の側が意識して働きかけるようにすることで、公民館が居場所になりうるということを伝えることができるはずです。

これからの公民館は、そこで仕事を作り出していけるような役割も求められていくでしょう。コミュニティビジネスであったり、なにか新しい出来事を起こしていきたいと思う人たちの実現の場になっていけるようになれば、さらにおもしろい展開がうまれてくると思います。

いまの公民館は趣味的な面が強いですが、新しいことを学び仕事をうみだし、くらしにつなげていくこと、それが本来の公民館の役割なのです。

以上

2016年2月6日

那覇市若狭公民館にて



座談会：村上英己（公益社団法人全国公民館連合会事務局次長）

宮城潤（特定非営利活動法人地域サポートわかさ理事／那覇市若狭公民館館長）

平良亜弥（特定非営利活動法人地域サポートわかさ「公民館を活用した芸術文化発信事業」
調査員／インタビュー担当）

鳥越一枝（特定非営利活動法人地域サポートわかさ「公民館を活用した芸術文化発信事業」
調査員／インタビュー担当）

文責：樋口貞幸（特定非営利活動法人アート NPO リンク）

以下のサークルにご協力いただき、取材いたしました。取材内容は HP に随時アップされます。

「公民館プログラムのたね」 <http://cs-wakasa.com/program>

那覇市中央公民館 「エヴァダンスシア与儀」「創作エイサー天之川」「那覇青少年舞台プログラム」

那覇市小緑南公民館「創作エイサー団体那覇太鼓」

那覇市首里公民館「古都首里探訪会」「首里クエーナ」

那覇市若狭公民館「サークルアロアロ」

那覇市石嶺公民館「石嶺伝統エイサー会」「親子図工教室」

那覇市繁多川公民館「繁多川しまくとうば会」「車いすダンスウィールの会」

那覇市牧志駅前ほしぞら公民館「那覇ムムチハンタープロジェクト」「ロボロボの会」

浦添市立中央公民館「浦添ゆいゆいキッズシアター」「ソニードギター合奏団」

南風原町立中央公民館「軽音楽サークル」

西原町中央公民館「指笛王国沖縄」

北中城村立中央公民館「ストリートダンス WINGS」

名護中央公民館「名護浦民踊サークル」「フラサークルマルヒア」

今帰仁村中央公民館「ミニ四駆」「なきじん民踊風車」

宮古島市中央公民館「フロイデ混声合唱団」

公民館利用者のこえ

サークル名：エヴァダンシア与儀			
公民館名	那覇市中央公民館	活動日・時間	木・17:00～18:00
代表者名	宜野座秀佳（ぎのざひでか）	活動人員	7名
設立年月日	平成27年(2015年)4月		



サークルの活動内容について教えてください

エヴァダンシア自体は10年以上経ちます。壺屋小学校、指導者は別ですが天久小学校でも教室をしています。壺屋小学校では3歳、幼稚園生もいます。主に娘と2人で壺屋小学校とこの指導をしています。

この公民館でのサークルは立ち上がったばかりです。元々壺屋小学校の教室に通っている子たちが、ここでサークルを立ち上げたんです。2015年4月に設立しました。

サークルに参加している人数は現在7名ですね。ソロ・ペア・2バトン・ダンスなど、豊富な種目があって、幼児から小学生を中心に、学校や年齢の違う仲間と共にイベントや全国共通の検定に向けて練習しています。楽しく時には厳しく技を磨き、マーチングや全国大会を目指しています。那覇市のイベントでは、『公民館まつり』『那覇まつり』のパレードに参加しています。

活動日は毎週木曜日夕方5時から6時です。

バトントワリング・ダンスを行っている数少ないサークルで、少人数ながらも、小学生を中心に活動をおこなっています。イベントに参加するレベルアップを目指して練習しています。

サークルの魅力は？

<制限された場所で工夫する>

踊っているときに曲の中に溶け込めること、バトンが体の一部のように感じられることですね。バトンと身体を使ってダイナミックな表現ができることが魅力だと思います。

マーチングの場合は人数が必要であったり、天井が高くないといけなかったり、音響の問題があるんですけど、バトンの場合は天井の高さがなくても、状況にあわせて練習することができます。例えば、狭いビルとビルの間でバトンを投げてターンをする練習は、バトンの投げ方やターンの練習として効果的なんです。狭いところの方が矯正できるんですよね。「場所がない」ではなくて「場所が技術向上の協力をしてくれている」という意識でいつでもどこでも練習が可能なところが面白いと思います。

一人でも練習ができるし、極端な話、トイレの中でも練習ができる。制限されない場所の場合、本人は自分がキレイに踊っているつもりでも、投げ方がまっすぐでなかったり、ターンが美しくなかったりします。でも自分ではそれに気づかないんです。場所として制限がある場合、例えば狭いスペースでバトン練習をして、壁にぶつかってしまった場合、「壁が動いてぶつかった」とは言えないですね。壁は動かないんですから。そこで本人がバトンの投げ方に問題があったのだと自覚することができるんです。それに、身体（低い天井で早くターンをする、狭いスペースで腕をきちんと上に上げるなど）の動きの矯正もしやすいんです。

そういう風に様々なやり方で練習方法を提供していかないと、子どもたちも飽きてしまうんですよね。基礎練習は、反復が必要だけれども、なかなか続かない。最初の練習では15秒で何回ターンができるかを測って、回数が増えるようになるのを楽しんで練習してもらっています。最初は15回（1秒に1回）しか回れなかった子が、1ヶ月後は30回（0.5秒に1回）回れるようになる。上達したことが数字で見えすぐにわかるので、意欲も湧き、継続につながります。ターンがある程度できるようになったら、今度は左回りの練習に移ります。右回りはキレイで早いけれど、左回りになると全くの別人。利き手は上手に扱えるけれど、そうでない手ではうまくいかないの、今度は弱い部分の練習にかかる、という風に練習します。現在は側転や逆立ちの練習をしているところです。そういう風に基礎練習を進めています。

サークルの雰囲気をお教え下さい

割と全体的に優しい子たちばかりです。例えば、誰か一人できないときも全員で励まし合ってできるまで見守るような雰囲気はできています。学校以外での時間の中で、チームとしての関係づくりが作れるようになってきています。

また、違う学年との交流もあるので、そういった意味で教室やサークルの時間は大切なんだろうと思います。一人っ子の子にとっては、お姉ちゃん的な存在が近くにいるのは安心でもあるんじゃないかな。今は、壺屋の子たちばかりなので、他の地域の子どもたちも入ってくるようになると、壺屋以外のカラーが入ってくるんじゃないかと思います。今後、新しい子たちが入って来るのを期待しています。

サークルの参加メンバーはどのような年代が多いですか

小学校2年生～5年生の子たちが集まっています。メンバーは女の子ばかりですね。男の子は壺屋や天久を含めてもいません。日本レベルで言うと、男の子のレベルは高いけれど、小学校中学年くらいになると、周りの友達にひやかされてなかなか続かないんですよね。昔はピアノやバレエも女の子の習い事というイメージがあったんですけど、今は男女関係なく普及しているので、バトンも男の子にも広まってくれたらいいんですけどね。福岡なんかでは男の子も結構バトンをしている子は多いです。

また、現代っこは、どこかで心の解放をさせないといけないんだと思います。楽しく、思いっきり好きな事ができる場が必要なんじゃないかな。

身体を使わずに、おとなしく上手に遊ぶ子が多いんです。また、口が達者で人の批判をすることが多いですね。いざ、「自分でやってごらん」ということになる、「なんでやる必要があるの?」と逃げってしまう子も多いので、なんでも挑戦させるようにしています。「すごい」というのは、「今、挑戦している自分がすごいんだ」ということがわかるようになってほしいです。できないけど頑張っている自分をすごいと思えるよ

うになってほしいです。

サークル参加メンバーの地域はどちらですか（公民館付近か）

地域は壺屋小学校の子どもたちばかりです。『那覇祭り』での発表を見た子や、壺屋小学校は学童も近いので、そこで練習の様子を見た子が興味を持って来て参加しているのだと思います。

7名のうち4名（ペア2組）が、3月の全国大会に参加することになっています。

ゆくゆくは、古蔵小学校、神原小学校など、近隣の小学校の子どもたちもサークルに参加してもらえようになってほしいですね。『公民館まつり』で出演することになっているので、そこで興味を持って新規入会してくれる子が増えることを期待しています。

メンバーとはサークル外での交流もありますか？

<子どもたちとのやり取り>

時々、自分ができないこととお友達を比べて落ち込んでいるお手紙なんかを内緒でもらうことがあります。その時に、「おうちで密かに、しっかりと練習をするといいよ」とアドバイスをしたりしています。自分の孫のように、子どもたちのプライベートな部分でのサポートができること、コミュニケーションの時間が楽しいですね。

マーチングが盛んになる前から教えていて、具志頭小学校、嘉数中学校、真志喜中学校や小禄高校、名護高校など、県内各所の小中学校、高校で教えていて、石垣にも講師で訪れたことがありますよ。マーチングの基本の動きがわからないということで、基礎を教えに行っていました。その後、県外に出た教え子たちが、お正月休みかなんかで沖縄に戻ってきたときも、連絡がきて自宅に遊びに来ることもあります。

今後の活動について

<全国レベルへ>

11月23日に沖縄支部の大会があり、そこで選ばれたメンバーが今度、大阪の大会に出場します。そこで上位に入れると、世界大会に行くことができます。

小学部のバトンで強いのは、福岡や関東、関西ですかね。沖縄のレベルはまだまだなんですが、以前は九州大会の後に全国大会だったので、全国に行くこともほとんどなかったです。全国レベルを目にする機会が出てきたので、これから5年後、世界に行けるレベルに持っていけたら嬉しいです。ただ、熱しやすく冷めやすいところがあるのと、バトンがなかなか普及していかないのが課題ですね。

<沖縄でバトンを普及>

県内・離島含め、小中学校・高校含めても、バトン部がひとつもないんです。沖縄では、今のところ体育協会でさえもまだバトンが普及していないみたいで、県民にいろんなところでバトンを普及していくことが今後の課題だと思います。

前原、小倉、与那城、コザなど、小学校で運動会や文化祭などでバトンの指導をしていたので、そういったところから普及するといいなと思います。

<子どもたちの成長>

バトンを広げたい気持ちもあるんですけど、子どもたちとの関りが楽しいのと、彼女たちのことが気になっているのでそこにエネルギーがいつているところはあるかもしれません。バトンの技術向上よりも、子どもたちのエネルギーの発散の場として、バトンを楽しんでもらいたい気持ちの方が今は強いかもしれません。子どもたちとの関係が楽しいですね。小さくても発表の場があると、そこに向けて一生懸命取り組める。達成できたときに、新たに目標も出てくるはずですよ。大会で一番になることよりも、自分で決められたことをきちんと責任をもって行動できるようになっていければ、個人の成長にもなり、全体の成長にもつな

がるのだと思います。

今の子は、秀でることを避けようとする傾向がありますね。100点ではなく70点くらいでおさまろうとする傾向があって、周りの様子を見ながら行動しがち。そうではなく、切磋琢磨できる楽しさを知ってもらいたいです。殻を打ち破って、やりたいと思って行動できたことを大切に、自分の変化を楽しんでほしいし、その子らしく生きていくようなことをバトンを通して、仲間との時間を通して体験してほしいと思います。

私自身、アメリカでバトンオンリーの時間を過ごした時期もあったんですが、今はスパルタではなく、萎縮しない、思いっきりできることを大切に指導にあたっています。自分が一生懸命になれるものを持てる子になってほしいです。それがあれば、いろんなことに立ち向かえると思うので。

<宜野座秀佳さん（エヴァダンシア与儀代表）について>

小学校3年生のときに、鼓笛隊が結成されたことをきっかけにバトンを始めるようになりました。小学生の頃はいわゆるバトンガールでした。それがだんだん、曲にあわせて踊りながらバトンをまわすような内容のものへと変化して、全国大会や世界大会なども開かれるようになっていきました。

小学生の頃からずっとバトンを続けていて、50年くらいですかね。東京出身なんです。結婚して沖縄に移ったんです。RBCのちびっこのど自慢『うたでヨーイ卓でドン!』という番組のオープニングやエンディングでバトンを踊ったりしていましたよ。その後、子育てのためバトンからいったん離れてた時期もあります。沖縄でなかなかバトンが広まらなかったこともあり、指導者がいないということで、西原高校などのマーチングの旗の指導にあたっていました。

話し手	宇良亜理紗（うらありさ）	肩書き	サークル参加者の保護者
活動歴	1年目		

サークルに参加したきっかけをお教えてください

3年生と5年生の娘がエヴァダンシアに所属しています。壺屋の※『放課後子ども教室』で体験したのがきっかけで、教室に入って、サークルにも参加することになりました。

※『壺屋小学校放課後子ども教室』

月曜日～土曜日まで毎日、児童が安全に楽しく、有意義に過ごすことができる場所を提供している。PTCAの方々の協力により、スポーツ、パソコン、バトン、学習、空手、手作り教室などの放課後教室が開講された。



サークルを続けている理由／たのしいところをお教えてください

学童には入れていましたが、元々、部活はやってほしいという気持ちがあったんです。ただ、壺屋は人数が少なく（一クラス20名くらい）、部活動がとても少なかったんです。サッカー、野球部もないという状況で、『放課後子ども教室』が結構充実していて、そこでの体験がきっかけで子どもたちがバトンに興味を持ってくれたので、ここでサークルを立ち上げました。

違う学年（幼稚園生～小学校高学年）との交流を通して、お互いに教え合ったり、下の子に教えてあげたりという関係もできているので、とても良いと思います。

サークルでの目標やモットーにしていること

目標を持って活動できるのはこの時期にしかできないことなので、つまづいて挫折しても乗り越える力を身に着けてほしいです。そういった時間というのが大切だと思っています。

公民館を利用して便利な所

公民館まつりで発表できることはとても嬉しいです。発表の場を設けることでバトンを知るきっかけになるのだと思います。また、バトンは技術が素晴らしいし、表現活動というのは素晴らしいと思っています。

活動をするためには、子どものために施設を借りる手続きとか、最初は面倒だと思ったけれど、始めてみるとメンバーのお母さん同士で協力することもできるし、練習の場としてはすごく必要です。

公民館を利用して改善してほしいところ。ここを良くしたらいいのと思うところ。

施設的な面で希望することは、駐車場がないことです。どうしても送り迎えが必要になるので、少しの時間でも駐車することができるようになると嬉しいです。最初は駐車場が使えないということを知らなくて、サークルを立ち上げてからそのことを知ってショックでした。続けられるかなという不安は正直ありました。他のサークルの方も困っている方はいると思うので、どこかに数台でも確保できたらいいなと思います。

取材日：2016年1月7日 報告者：平良亜弥

サークル名： なきじん民踊風車（かじまやー）			
公民館名	今帰仁村中央公民館	活動日・時間	火・14:00～16:00
代表者名	謝花勝子（じゃはなかつこ）	活動人員	40名
設立年月日	昭和60年4月		



サークルの活動内容について教えてください

＜地域婦人会を中心に結成＞

民踊のサークルとして活動をしています。今帰仁村中央公民館で週に1度の練習をおこなっています。

昭和60年に婦人会を中心に今帰仁民踊愛好会を結成しました。今帰仁村の19の各字に公文書を出して、30名ほどが集まりました。

婦人会を中心に地元の仲宗根公民館で、夜に活動をしていました。地域で5～6年たったころ、中高年の方から「参加したい」という声がでました。中高年が増えると夜の練習はきびしいです。当時は地域で車を持つ人も少ない時代です。みな乗り合わせでしたから集合場所へ集まるのも一苦勞でした。

平成2年に昼間の「なきじん木踊会」、高齢者を中心に「今帰仁ゆうなの会」を結成。地元の仲宗根のメンバーの会（なきじん民踊風車・かじまやー）と3つになりました。翌年には「今帰仁うりずんの会」、「今帰仁あざみの会」とサークルは5つもできました。（現在あざみの会は中心メンバーが体調不良で休止中）

公民館活動の発表の場は、文化協会が主催する各種まつりに参加しています。今帰仁では参加するメンバーが同じ人であったりするので、いくつもあるまつりを統合して「今帰仁村まつり」としています。そこにはサークル活動をするメンバーが舞台発表をおこなっています。高齢者と一般とわかれて盆踊りもあります。

サークルの魅力は？

＜達成感をみんなで共有＞

楽しい、踊りたいというメンバーが増えたんです。その後も海洋博のイベント、花のカーニバルなどで駆け出されます。そういうイベントは練習の間は大変ですけど、達成感をみんなで共有するものですから、参加してよかったねととても楽しい気持ちになります。

このようにレクに入った人たちは、行く行くは婦人会の役員になっていくという流れができました。やはり、ボランティアで人のために働くことが好きな人ができるんですよ。地域に密着してボランティアができることは素晴らしいことです。結局は地域が潤うわけですから。

サークルの雰囲気をお教え下さい

＜ゆんたく半分、踊り半分というバランス＞

踊りが好きという理由できていますから、ゆんたく半分。皆しっちゃーるー（親しい間柄）です。やんばるは家族的雰囲気と言いたい放題。でも誰も咎める人はいません。ゆんたくも弾んで、休憩時間もつい長くなっています。でも、これが、ストレス解消になっていますね。

サークルの参加メンバーはどのような年代が多いですか

＜愛好者は小学生から 90 歳まで＞

女性を中心のメンバーです。最高齢は 90 歳くらいまでいますよ。

大会のときに男性をお願いしてやっていますが、5～6 名ほど。女性のほうが元気です。これが、長生きの秘訣ですね。生きる力はこのようにレクしながら、いろんな情報が得られます。

平成 24、25、26 年と子ども民踊教室をスタートしています。中央の民謡フェスティバルは沖縄市まで出かけて行きます。学童の子どもたちがそこで発表をしています。名簿では 40 名くらいいますが、30 名程が参加しています。4 つの会をトータルすると 150 名程になります。中心メンバーでなくても、ついていくだけでもいいですよ、こちらに来ておしゃべりするだけでいいですよと声かけしています。ストレス解消になりますから。

サークル参加メンバーの地域はどちらですか（公民館付近か）

各字の中心メンバーがきています。今帰仁村のメンバーで、各地域の老人クラブの総会、新年会などで踊るときには、このメンバーが中心になって踊りを教え、指導をします。

「寝たきり老人」という言葉よくききますが、「起きたきり老人」にならないでよと声かえています。「起きたきり老人」とは、家にいてテレビだけみていて、外に出ない、活動しないという人のこと。できるだけ、外に出て、交流していこうと呼びかけています。

メンバーとはサークル外での交流もありますか？

＜役割分担で責任感を育む＞

新年会など練習以外の集まりもあります。会員ではない人も参加することもあります。サークル以外に集まるほうがいいです。

昼間は仕事して忙しいメンバーですから、グループ分けをして役割を分担しています。

そして運営に関わっていただくようにしています。誰かがやるだろうでは困りますし、それではひとりの負担が大きくなります。フェスティバルやレク大会、新年会にグループで責任をもって関わるようにしています。

施設訪問も多く行っています。いつでも来ていいといわれますが、やはり節目節目のときに訪ねています。お誕生会や敬老会などです。自分たちと島言葉などほかのサークルにも呼びかけておこなっています。

サークル活動ですが自分たちだけで楽しむのではなく、必要とされているところに行く。施設の方々は話し相手がほしいんですよ。知っている人がくるとうれしいですし、とても喜んでいただいています。これは時間をさいてでもいかないとおもいます。

今後の活動について

＜人材育成が課題＞

リーダーの育成が課題で、一番の悩みです。育成したいリーダーは50代の方々ですね。みんな現役でお仕事していたりしますから、昼間の講習に参加するのが難しんです。

若い人たちは情報が溢れています。いろんなものがあって、情報を得ることができます。ここにこなくてもいい。イベントなどの練習など積極的にやってくれている部分もあるので、助かっていますし、育ってはきているけど、私がやっている限りはやってくれないと思います。

自分が出来る間は民踊をずっと続けたいです。これがないと生活に潤いがなくなるという気持ち。月曜日からはじまって午前中は教室をまわって、ずっと練習があります。名護へも教えに行っています。

毎年二月に九州地区の研修会があります。各県持ち回りでいろんな地域に行けて楽しいです。自己負担ですが、交流目的で参加しています。

話し手	諸喜田スエ子（しょきたすえこ）	肩書き	なきじん木踊会代表
活動歴	40年以上		

サークルに参加したきっかけをお教えてください

＜地域を支えてきた婦人会の存在＞

私は教育委員会と役場の仕事をやっていました。催物での婦人会への依頼が多いんですよ。参加するとしても、いきなりは踊れません。普段からやっていないと。昭和47年の若夏国体で各村から5名くらいのメンバーを募って、集団演技をやることになり、若夏国体を盛り上げたのです。そのあと、民踊の会員が急増しました。



＜サークルを立ち上げる中心人物になった理由＞

周囲からやらざるをえないような立場に追い込まれます(笑)。今帰仁ではPTA＝婦人会というかんじで、子どもたちが学校に行くようになると婦人会活動をやらないといけないということになります。「忙しいのはみんな一緒なので、言えないさー」私は子どもがひとりだったので、暇とか、融通がきくと思われたのでしょう。そして、性格的に断り上手じゃないんですよ。

サークルを続けている理由／たのしいところをお教えてください

＜使命感で地域貢献に励む＞

私から民踊をとったら、何も残らないかもしれません。自分に与えられた仕事の一部。自分がやらないと

いけないという責任のようなものです。それは、喜びでもありますよ。自分が楽しくないと、みんなを楽しませてあげられません。

主人を亡くしたときも、みんなに声をかけていただき、サークルに呼ばれたことがうれしかった。そういう面では自、生き甲斐といいますか、民踊にたすけられています。みんなと一緒に楽しむことができます。趣味の域は超えていますね。自分のためにでもあるけど、地域のためにという気持ちです。

サークルでの目標やモットーにしていること

目的は健康づくり、いきがづくり。親睦や地域の和づくりです。

公民館を利用して便利な所

公民館活動は使用料が免除されていますから利用がしやすいです。中央公民館が集まりやすいです。各字になるとやはり集まりにくい。(クーラー代はでます)

公民館を利用して改善してほしいところ。ここを良くしたらいいのと思うところ。

公民館は、今は部屋が少ないくらいなんです。練習で使いたいときに予約がとれないということがありません。

＜サークルの理解者を広げたい＞

このクラスは100名ほどいましたけど、足が動かないとか、老老介護がはじまったりで、人数が減少しています。身内に不幸があると喪に服す時間もあります。田舎の場合はサークル活動をしていると、遊んでいると思われてしまいます。体操はできても、踊りはできないという声も聞こえてきます。やはり世間の目が気になるという方も多いです。健康づくりや交流という目的に注目してほしい。体を動かすことで、ふさぎ込んでいる気持ちが楽になる場合もあります。もっと理解を広げたいです。

＜サークルを続けていたころの心得＞

講習会があると、お昼や夕飯の準備をしてから出かけました。やはり家族に迷惑はかけられませんから。準備してでかけることは、リーダーさんは心得ていますよ。

取材日：2016年1月19日 報告者：鳥越一枝

サークル名：浦添ゆいゆいキッズシアター			
公民館名	浦添中央公民館（分館）	活動日・時間	日・10:00～13:00 水・18:00～21:00
代表者名	真栄田義之（まえだよしゆき）	活動人員	50名
設立年月日	平成12年		



サークルの活動内容について教えてください

2000年に浦添市の事業でスタートしました。

平成18年に市の事業から離れ、任意の団体になっています。

水曜日18時～21時までダンスのレッスン。日曜は10時～13時に演技のレッスンを行っています。日曜は朝の9時から寺子屋といって自主勉強をしています。大きくは年2回の発表があり、そこを目標に日々練習を行っています。10月は本公演（小3～高3）2月は大人も加わっての公演になっています。

<単年度の市の事業から継続できる団体へステップ>

演劇を活用したワークショップの開催をすることで活動を始めました。市での事業は1年単位の単年度です。ということは、来年あるかどうか分かりません。継続するかどうかは年度末もしくは年度がはじまってから決まるという性質がありました。当たり前のことですが、事業は終わったら終わりなので、関係者からは子どもたちの盛り上がりを見ると任意の団体として継続してやる方がいいのではないかという声がありました。

ありがたいことに各方面の努力で、事業は毎年開催にこぎ着けていたという状況でした。

立ち上げ時は平田大一さんと始めました。そのころ平田さんがうるま市の勝連で「キムタカのあまわり」という舞台づくりをやっており、勝連の翌年に結成されたのが浦添の団体になります。始めの頃は地元の歴史を取り入れた「太陽（ていだ）の王子」という舞台をつくっていました。

＜演劇を活用した事業成果が大きい＞

事業の後に団体を結成することになったのは、継続でやってきた（1年は休みがある）成果が大きかったです。

浦添市の文化振興事業については「文化振興長期計画」に沿って事業が行われていきます。大きな柱に市民の演劇を活用した事業というのがありました。子どもたちが成長し、変わっていったということから、浦添の人材育成として非常に良いということになりました。実際にいろんな人材を輩出しています。

団体をつくり今日に至っています。子どもたちも成長して、ゆいゆいキッズシアターを卒業しても舞台に関わる精鋭たちが出てきました。そこで大人の演劇を創作することができるようになりました。

2011年に「アオリヤエ」というオペラのワークショップを行い、舞台発表を行いました。翌年にはそれが発展する形で琉球オペラ創出事業として大人の演劇を創作しました。

子どもの演劇への取り組みを積み重ねた実績で、子どもの成長に伴い大人の部分もでてきたということになり、理想的な展開になっています。5年前に仕掛けて続けており、浦添の事業としては世代間交流がすごく上手くいっている事例になっています。

＜会を支える体制＞

会を支える大人は4人。代表の真栄田義之さん、副代表の大村広美さん、事務局長の佐久川幸江さん、書記会計赤峯尚美さん。子どもと大人の間をつなぐという意味もあり、青年部というのを作っています。青年部長に棚原奏さん、副青年部長に石川慶子さん、真栄田愛里さん。

保護者の方々は、父親たちは「腕っぷし父さんず」。母親たちは「肝玉母さんず」というグループで活動しています。

サークルの魅力は？

＜人材育成と世代間交流＞

ゆいゆいキッズシアターの活動は、感動産業と同じです。ゆいゆいの魅力は感動をどう与えるかということにつきると思います。

メンバーも感動することが大事ですし、そこから観客に波及してゆく感動も大事です。

関係者へも感動が伝わります。いったい何が魅力か紐解いてほしいです。

子どもたちとは異なるところで、運営する側は感動するような仕掛け作りをどうつくれるのかを考えなくてはならないです。

サークルの雰囲気をお教え下さい

練習中はとても明るく和気あいあいとしています。小学生から高校生までいるので、年齢の幅がひろいです。年上のメンバーが面倒をみるという感じの雰囲気があります。

オーディションで希望の役につけなかったときは、落ち込んでいるメンバーについては話をしてフォローします。それは「選んだ演出家の立場の人」がフォローします。

落ち込んでいることや、ショックだったことを言える子はまだいいんだけど、言えない子もいる。家に帰って、いろいろごちゃごちゃになって、保護者から声がきこえてくることもあります。選ばれなかったということ、それが学びの場でもありますね。自分の気持ちを言えるようになるといいなと思います。

中高生が多いと落ち着いていますし、兄弟が少ない現代で、異年齢の子どもたちというのが一緒にいることはあまりないですから、面倒みるということもいいとおもいます。

基本は楽しいという雰囲気です。

サークルの参加メンバーはどのような年代が多いですか

小学校3年生から高校3年生までです。小学生が多いです。高校生5名中学生20名小学生25名です。

サークル参加メンバーの地域はどちらですか（公民館付近か）

浦添の事業として始まったので、浦添のメンバーが多いですが、近隣の西原や宜野湾などからも参加者がいます。佐敷や東風平からくるメンバーもいます。基本的に地域にこだわらずにだれでも参加できますが、練習場所に通えるかということもできます。

メンバーとはサークル外での交流もありますか？

＜子どもたちの活躍＞

練習や舞台公演以外では分館まつりをやっています。分館を利用している「子ども文化連盟」とイベントをします。

以前には「太陽の継承」というのを結成して、浦添で活動する子どもたちの太鼓、吹奏楽、組踊、合唱、ダンス、ゆいキッズシアターで浦添市でだこホール柿落しをやりました。そのような交流もあります。

＜東日本大震災以降は福島の子どもたちとの交流＞

東日本大震災以降は福島の子どもたちとの交流もあります。これは「世界のうちなーんちゅ大会」のときに、震災のときに元気をもって感動した曲でCDをつくった企業からその売上の100万円はソマリアへ、あとの100万円を福島の子どもたちへ寄付をしたという経緯があり実現したものです。40数人の子どもたちが福島から沖縄へきました。スポーツで交流したり、ゆいゆいとダンスワークショップで交流したりしました。

＜受け身の観客から主催者へ＞

上田情報ビジネス専門学校主催の講演を聞きに行くことになったとき、ちょうど講演者がスポンサーである長野グランセローズの野球の応援に「我無者羅応援団」と行くということで、子どもたちも観戦させてほしいと頼みました。最初は、いっしょに観戦する予定だけでしたが、回の途中にあるグランド整備の時にファンサービスであるイベントで専属ダンサーが出演出来ないため、急遽代わりに出演していただけないかとお話をいただき、沖縄で練習して行って、交流しました。ただ講演を聞きに行くお客さんから、主催者になることで子どもたちのモチベーションが高まりますし、そのような交流のほうが子どもたちの成長にいいと考えます。こっちのほうが講演を聞くより何倍もいいと思うんです。

シアターの組織にあるリーダーズの20数名で、金武のログハウスに研修会もおこなっています。

運営委員は本土へ公演会を聞きにいったりもしています。運営しているメンバーは演劇関係者でもなんでもないので、東京などへ観劇（ミスサイゴン）にいき勉強をしています。高校生以上でいくときはライオンキングなどを観劇したりしている。大人は完全自費です。子どもは予算化して行くようにしています。

今後の活動について

地域への貢献です。

私たちの活動をいろいろな施設に試してみてもらおうとか、子どものげんきを大人にもみてもらいたい。ゆいゆいキッズシアターだからできる地域貢献ということをやりたいです。

卒業生たちは、大学に就いて社会人としてそれぞれの道を歩んでいます。学校の先生もいれば、演劇のプロの道へ進んだ人もいます。

演劇の道だけを進んでほしいわけではないのです

演劇を道具として活用して、感動体験を積んでほしいです。「調子がいいときは全部わすれていいよ」と語っています。でも、辛くなったときに、死にたい、逃げ出したいと思うようなときに、ゆいゆいキッズシアターでやっていたことを思い出してほしい。苦しくなったら、おおきな声をだして歌うんだよっていいです。

話し手	真栄田・赤峯・町田 (まえだ・あかみね・まちだ)	肩書き	事務局
活動歴	16年		

サークルに参加したきっかけをお教えてください

＜子どもたちの姿をみて、大人がのめり込む＞

私は子どもが小学校のときに参加していましたから、それからの付き合いです。10年以上保護者として参加しました。親戚でもあり、太鼓も一緒にやっている現事務局の大村広美さんから「事務的なことを時間あればやりませんか」と誘われました。子どもも一生懸命やっていたので、どういうものか？と思って見学にきたんです。その姿に胸を打たれました。子どもたちの懸命な姿をみて、大人がのめり込むという感じで、むしろ、子どもが卒業しても私は続けています。(赤峯さん)



＜クレマーから代表へ・真栄田さんの関わり＞

代表の真栄田さんの参加のきっかけも、子どもが参加していたことでした。

「私の子どもは卒業しても音楽のところでずっと関わっています。親子で途切れることなくかわりつづけているんですが、最初はクレマーでした(笑)。」

仕事を切り上げて子どもの迎えに行ったときのこと。父親としてできることをという気持ちもあり忙しいなかで時間をやりくりしています。ところが、練習は定刻の21時になっても終わらない。「小学校の4、5年というのは体力もない、明日は学校もあるというのにいつまで練習しているのか」とクレームを言いました。すると返ってきた言葉は「あなたやる気ありますね」だった。変な人たちだと思いましたよ。自主公演のころには子どもたちが一生懸命チケットを売っている姿に奮起し、自分もちょっとがんばったんですよ。で、気がつけば、どっぷりやっています。

そのころは浦添市からの予算もなく、自分たちでチケットを売って舞台の資金を調達していました。(真栄田さん)

サークルを続けている理由／たのしいところをお教えてください

＜大人の仲間ができたこと＞

子どもが卒業しても続けている理由。それは親戚の子どもたちがいっぱいいるような感じがあるんですよ。家族的な親しみがありません。そのときからの仲間が今もやっています。大人の仲間ができたということも継続の理由です。(赤峯さん)

＜子どもの成長が心を動かした＞

私はみなさんにもこの思いを伝えたい、伝えないといけないなと思って参加しています。最初は難儀でしたが、やっているあいだに、子どもたちの成長していく過程がみえてきます。それがすばらしいと伝えたくてつづけています。子どもの成長が親のこころを動かし、真栄田さんはいま代表を務めています。大人は子どもの笑顔を見ると元気になります。私は涙腺が弱いのか、子どもの一生懸命な姿をみると、ダンスをやっているだけで涙ができてきます。(真栄田さん)

＜常に変化すること＞

変化がないと楽しくなくなってきました。「毎年おなじことばかりやって、子どももあきてるさ」という親たちもでてくるんですよ。でも、なんでこの仕掛けをやっているかわかっていると、考えかたが変わってきます。自分の子どもの成長だけ思っていた親たちが、あの子もかわったねとみえてくることで、家族や家庭が変わってくるんですよ。子どもが感動しているだけではこんなに長くはつづかないですよ。(真栄田さん)

サークルでの目標やモットーにしていること

＜モットー＞

最近語っているのは、「あいさつ、そうじ、すなお」ということ。

長野の上田市に、上田情報ビジネス専門学校の副校長比田井和孝先生がいて、そこが実際に専門学校は資格をとって、就職につなげるというのが専門学校の学びだけど、その学校は就職したあとの話をしているんですよ。就職したあと、学生たちが幸せの人生になる授業をしている。そこが「あいさつ、そうじ、すなお」をモットーにしているんですよ。

県外のさまざまな情報を集めていい所は取り入れるようにしています。(町田さん)

公民館を利用して便利な所

公民館を利用しているのは。演劇をするのに十分なスペースがあるということ。浦添市の交通機関の便利さなどがあります。

公民館を利用して改善してほしいところ。ここを良くしたらいいのと思うところ。

改善点などはとくにないです。

ホームだから。ありがたい。使わせてもらって、感謝の気持ちです。

＜16年間続けてきた秘訣＞

子どもたちの笑顔です。これがあるから、いつまでもできるとおもいます。

＜一番の苦労は集客＞

お客さん集めが苦労をしています。ふたをあけたら満杯になっているんですが動員が当日しかわからないのです。数字が読めないとしてもドキドキします。チケットは前売りはそれほどでないです。ほとんどが当日券ですね。会場から人が溢れて怒られたこともあります。ですから「ゆいゆいキッズは小ホールではしないでくれ」と言われて、大ホールでやっているのですが、キャパ1000で2回公演をほぼ満席にします。手売りです。プレイガイドでも販売していますが、動かないですね。ほとんど手売り。観客は出演者の身内が多いです。子どもの友だちと親世代になります。(赤峯さん)

＜クオリティを求めて＞

子どもが子どもへ教えていくというのは異年齢での交流など良い面もありますが、作品への向き合い方ということでみると、自己満足に陥ったりして、成長がない場合もでてきます。高校生にリーダーをつくっていくなかで、高校生に伝える人が必要になってくる。青年が必要だと感じています。リーダーズに対してはOBが行っています。

小学生は小学生の感受性があり、中学生は中学生の反抗期があり、高校生は高校生のジレンマがあります。大人が何か言うとうとうしても説教臭くなります。人間関係のなかで成長するしかないから、青年がいればよいサイクルになると感じます。大人がいるとヤラされている感がでてきますから。憧れた先輩が話をするの

はいい効果があります。

基本的にはプロの演出家をいれています。プロの演出家と子どもたちが一緒につくりあげるということをやります。演劇の指導者、プロが入って舞台を作ること、子どもたちにいろんな考えがあることをつたえたいです。作品も沢山あります。

作品としても評価が必要ですし、学芸会になってはいけないと思っています。舞台としてのレベルは高いものを目指しています。完成度を求めないということは絶対ありません。レベルをもっと上げるために努力をしています。子どもたちからレベルをあげるとか、衣裳をこうしたいとか声があがってきます。

ちょっとだけきつい場面を作ること、成長をうながす、乗り越えられるくらいのハードルをあたえるという具合です。(町田さん)

<浦添市のキャリア教育>

私たちの活動は人材育成につきます。

「世界のまち小」というイベントをやりました。

これは分館に入居している国際交流協会さん、文化協会さん、浦添市こども文化連盟太陽樹(ティダージュ)さん等を活用して展開しました。浦添商業と、昭和薬科の高校生 80 名。琉球銀行から講師をまねいて、世界のお金の流れ、為替の勉強をしました。実際に各国のお金をあつめてきて、両替し、食事等もトルコアイスなど世界の各地のものを提供しました。エコにも注目して、那覇市リサイクルプラザから、洗食機付の車両をお借りしトレイなど食器をかりてやりました。そういうイベントもやっていました。

そのころは、藤原一博先生の「よのなか課」という教科書を活用して、キャリア教育の一環のことをやっていました。港川中学校の子どもたちが公民館を飛び出して、実際の通り会で職場体験をしていったということもありました。

ファーストフード店の模擬店を出店して、マーケティングのことを考えてみたり。どこに出店したら儲かるかということ、子どもたちと考えていく中で町の立地のこと、駅の1日の利用者数を調べたりして、この場所というのを決めるまでをディスカッションします。この勉強会の中に実際のファーストフード店の関係者がいて、現場の声を聞くということをやりました。

キャリア教育、人材育成にこだわっています。次の時代を作っていくのは、この子どもたちですから。(町田さん)

取材日：2016 年 1 月 10 日 報告者：鳥越一枝

サークル名：創作エイサー団体那覇太鼓			
公民館名	小禄南公民館	活動日・時間	木・19:30～21:30 月・19:30～21:30 (小禄福祉センター)
代表者名	与那覇仁（よなはじん）	活動人員	35 名
設立年月日	平成 9 年 (1997 年) 4 月 1 日		



サークルの活動内容について教えてください

正式な設立としては、1997 年 5 月なのですが、登録上は 4 月 1 日になっています。私自身は、代表をして 5 年目で 8 代目です。24、5 歳の時に代表になりました。現在 29 歳です。私の前までは、会長の入れ替わりが結構あって、5 年続いているのは長い方だと思います。普段はカルチャースクールでエイサーやウチナーグチを教える立場にあります。

活動日は、毎週月曜日と木曜日に 2 時間ずつ練習をしています。月曜日は小禄の福祉センターで練習をしています。イベントなど発表の前になると、通常の練習時間だけでは足りないので、特別練習を入れています。演舞は沖縄の伝統芸能エイサーを基にした創作太鼓で、勇壮で明るく、誰もが楽しめるサークルづくりを目指しています。

沖縄県内のエイサーコンテストや、世界エイサー大会にも出場(3 位)しています。年に何回か遠征にも行っていて、3 日前は現地のイベント屋さんから依頼があり、マカオにも行かせていただきました。

サークルの魅力は？

ちょっと変わった演出や振り付けが那覇太鼓の特徴で面白いと思います。振り付けはみんなで考えています。振り付師がいる団体もあるんですが、那覇太鼓はみんなで作るというのが結構珍しいと思います。一人の人が振り付けを担当すると、その人の特徴が出てきて、それがそのエイサーの特徴になると思うのですが、那覇太鼓の場合はある意味特徴というのがないとも言えるかもしれません。いろんな人のアイディ

アが入ってくるので、バリエーションがあるんです。

振り付けを考える時は、メンバーそれぞれに振っていて、その時に、「他のエイサーの振り付けを参考にするのはなく、全く違うダンスやバレエなど、エイサーに関係のない動画を見まくったらいいいよ」と話しています。

海外の方が初めてエイサーを見た時の反応がとても良くて、盛り上がり方がすごいです。那覇マラソンでの応援で『YMCA』の曲にあわせて踊るんですけど、すごく盛り上がります。たくさんの外国人のラガーと一緒に写真を撮っていくんですが、一年後、同じ人が那覇マラソンに参加していて、去年撮影した写真を持ってきてくれた、というエピソードもあります。面白いですよ。

持ち曲はたくさんあって、今は踊っていないものも入れると、全部で50曲くらいでしょうか。洋楽なんかもあります。

私自身、趣味でブレイクダンスもやっていましたし、海外に行っていたときに洋楽をたくさん聞いていたということもあってでしょうか、伝統芸能に限らずいろいろなところからアイデアを得るという感覚があります。趣味がたくさんあって、それらが高じて那覇太鼓に活かされているのだと思います。三線は、教室に通っていたわけではなく、趣味で自己流で弾き始めたんです。楽器では他にアフリカのジャンベをずっとやっていたので、打楽器は元々好きですね。エイサーに関しては、実は本職というより、趣味の一環だと思っていて、自分が持っているいろいろなものをエイサーで表現しているというところはあると思います。会長という立場ではありますが、完全に個人的に楽しんでいますね。

サークルの雰囲気をお教え下さい

週2回の練習に加えて、毎週末は演舞が入ることがほとんどなので、みなさん結構忙しいです。遠征も入るので、その時には、出演するメンバーはオーディションして決定しています。

普段は、先生という立場の人は特にはなくて、先輩が後輩に教えるという感じで練習をしています。大人だけではなく、子どもたちも新しく入ってきた子たちには、長くやっている子が教えるという風になっています。

通常の練習時は送り迎えではありますが、那覇マラソンや一万人エイサーの時などは、保護者の皆さんが給水係などを手伝ってもらったりなど、ご協力いただいています。

サークルの参加メンバーはどのような年代が多いですか

現在35名で、子どもから大人まで参加しています。一番下は小学校1年生から受け入れています。一番上は、29歳（与那覇さんご自身）です。そのうち、15名くらいが小学生で、残りの20名が中学生以上ですね。成人はそのうち5～6名くらいですかね。男女の比率としては、6:4くらいで、女性の方が比較的多いです。

サークル参加メンバーの地域はどちらですか（公民館付近か）

ほとんどが那覇市内の方です。一人、南風原の方がいますが、那覇よりですね。一人小学6年生の女の子が4月に引っ越ししてうるま市に行ってしまうようなんですが、嬉しいことに、うるま市に行っても那覇太鼓に通うと言ってくれています。続けて欲しいなと思っています。

メンバーとはサークル外での交流もありますか？

27年度の活動内容は、1年で演舞111回、遠征8回、自主公演・大会3回です。

遠征には年に何回か行かせていただいています。去年はハワイへ公演に行かせていただきました。他にもニカラグアというところに2月に県の文化振興会の依頼でエイサー指導に行く機会がありました。11月には那覇市の依頼でブラジルの方にも指導で行かせていただきました。那覇市の姉妹都市でサンビセンテ市というところに行ってきました。過去にはベトナム、マカオ、台湾、韓国、グアムなどに遠征に行かせてもら

いました。

主要メンバーが中心になって、週末はほとんど演舞が入ります。練習時間は週2回ということになっていますが、演舞の回数など含めると週3～4回エイサーを踊っています。成人のみなさんは普段は仕事をしていますし、子どもたちも平日は学校もあるので、結構忙しいではあります。学校の方でも文化面でのポイントというのがあるようで、文化的な課外活動を積極的に取り組んでいるところもあるようです。受験生の中には1年間エイサーに打ち込むために勉強をお休みする子もありますが、勉強に集中ができないので両立させるという子もいます。

今後の活動について

<後継者育成>

後継者の育成もそうですが、現在、地方（じかた）が私だけなんです。三線を趣味でやっていたのもあって、生演奏の時は私が弾いています。人が足りない時は、私も踊りますが、今はできるだけ若いメンバーに踊ってもらえるようにしています。地方に入れる人がもう少し増えると良いなとは思いますが、なかなかみなさんエイサーを習いにきていますのでそこまではいかないですね。ただ、慣れてきた頃に三線にも興味を持って練習してくれる人がいたら良いなとは思っています。

<青少年健全育成>

健全育成にも力を入れたいと考えています。小さいうちから組織に加わるという経験はなかなかないと思いますし、習い事のように個人指導とはまた違う、何十名という人たちと毎週2日集まるだけでも良い経験になっていると思います。青年会の中での関係性とはまた少し違うと思いますし。

また、年齢で完全に分けて練習をしている団体もあるんですが、那覇太鼓はそれはしないようにしています。うちでもそういう風に分けてみようか、という話は出たんですが、それは違うなということになりまして。エイサーをしっかりと習うということだけであれば、その方が効率がいいと思うんですが、エイサー以外の大人との交流も含めて大事なことがあるので、それを考えると練習の質も時間もかかるんですけど、分けずにそのままいこうということになりました。大人の背中を見て、子どももいろいろと学ぶと思うので。また、子どもをみるということは、大人のためにもなると感じています。

話し手	与那覇仁（よなはじん）	肩書き	会長
活動歴	5年目		

サークルに参加したきっかけをお教えてください

<カナダ留学を経てツアーコンダクターの道へ>

高校からカナダの高校に通っていき、卒業して帰ってきて、その後オーストラリアのタスマニアにある大学に通っていたのですが、中退してツアーガイドの専門学校に1年通って資格を取りました。専門学校卒業後も3年程オーストラリアに残ってツアーコンダクターの仕事をしていました。

海外に行くことで沖縄の文化を意識しました。特に、オーストラリアにいる時には、アボリジニーの文化が残っていたんですが、イギリスに植民地化されてその文化がなくなってしまったということを専門学校の授業で習うんですね。琉球の歴史とも重なる部分があって、沖縄だと文化がなくなってしまうことに対してそのままになりがちなんですが、オーストラリアでは先住民ももうほとんどいない状態なんですけど、文化や言葉を残そうということを必死にやっています。そこが沖縄とは違うところだなあと感じまし



た。沖縄でも文化も言葉も残そうと言ってはいるけれど、動けていないところがあるなと思うと、自分のルーツについても考えるようになりました。それで7～8年前に沖縄に戻ってきたんです。

<エイサーとの出会い>

その時はエイサーには特に興味は持っていなかったんです。たまたま、那覇市が主催していた「うちな〜ぐち講座」というのがありまして、無料講座だったので参加したんです。

講座は半年くらいの期間で、最後の発表会の時にエイサーもちょこっと習って発表しようということになり、受講生みんなでエイサーを習ったんです。その時エイサーを教えにきてくれたのが、『那覇太鼓』のメンバーだったんです。当時は『那覇太鼓』のことも全然知らなかったし、エイサーをやりたいと思っていたわけでもなかったんですけど、「入らないか？」と勧誘を受けたんです。「入ったら女の子いっぱいいるよー」という誘いに乗って（笑）。そんなノリで入りました。講座の受講生で入会したのは私一人だけでした（笑）一人ではあったんですが、「飲み会いっぱいあるよ」ということも聞いていたので。それに、沖縄に帰ってきたばかりで、沖縄の文化に興味もあったということもあったと思います。沖縄の文化に触れるようなことであれば何でもやってみたいという気持があったので、同じ時期に舞踊も始めて、通っていたんです。入った当初は、エイサーは続いても1年くらいかなとは思っていたんですけどね。それでエイサーを始めて3年目くらいの時に会長になったんです。3年目で会長になるというのは、異例ではあったんですけど。普通は5～10年くらい続けてから会長になるんですが、ちょうどその時に新しく会長を決めないといけなくて、誰もいなかったのが私が引き受けることになったんです。会長に特に年齢制限はないんですが、私が教えてもらった時の会長も20代でしたね。皆さん30代くらいになると現役ではなくOBとして関わる方がほとんどです。

ウチナーグチを教えてくれたのは、比嘉光龍（バイロン）さんでした。講座の後も個人的に教えてもらっていて、一緒に活動させてもらっています。光龍さんが出版した時には、出版記念LIVEで私は舞踊を踊ってコラボしました。全部繋がっていて、好きなことをやっているだけなんですけど、楽しんでします。

海外で海外の良さを伝えるのもいいんですけど、やっぱり自分の地元の良さを伝えたいなあって、沖縄でもガイドの仕事をちょこっとしながら、沖縄の文化芸能を表現して伝えられることができたと思っています。

サークルを続けている理由／たのしいところをお教えてください

会長をして5年目ですけど、私がずっと会長のままだと育たない部分というのがどうしても出て来ちゃうんです。なので、活動しながら同時に後継者も育てていかないとはいけんですけど、なかなか辞められないのは、後輩たちが人間として成長していくのを見るのが楽しいんですね。エイサーが上達するということではなくて、人間性の部分での成長ですね。もっと良い経験をさせたい、もっと成長させたい、という気持ちが続いていますね。メンバーのために何かしたいという気持ちがあって、私自身はもう踊らなくていいと思っているんです。裏方で良いと思っています。

サークルでの目標やモットーにしていること

那覇太鼓としては、イケイケの年頃の人たちがやっている感じで、大会でもいい成績を残すというのをこれまで力を入れていたんですが、最近は子どもたち（小学生）が増えてきたので、健全育成にも力を入れていきたいと思っています。エイサーだけを教えるような団体ではなく、エイサーを通して人間関係だとかを教えていけるようなことができれば良いなと思っています。那覇でもなかなか学校に行けていない子もいて、コミュニケーションに問題を抱えている子たちもいるので。

実際、エイサーをすることで変わった、という子もいるんです。一昨年、障がいを抱えている子を受け入れたんです。最初は少し悩んだんですけど、面白いのは、その子の成長のためにと考えて受け入れたんですが、実際は教えてもらっているのは、そのまわりの方だったんです。エイサーを教えるにも、普段と同じような伝え方では伝わらなかったりするんです、そこでどうにかして伝えたいと思ってまわりが一生懸命やるんですね。何か、とても感動しましたね。身体的にも知的にも障がいを持っていて、20歳の子です。2年目

で、なかなかイベントでの演舞には出演してはいないんですが、公民館まつりだったり、地域の催し物には出演できるようにしています。今後は、特別支援学校との連携だったり、福祉的な意味を持った活動もして行けたらなあと思っています。エイサーが上手になること以上にそういったことがもっと大切だなと思います。登校拒否の子たちでも、学校に行けなくて自宅にこもるしか選択肢がない、というのではなくエイサーをただ踊りに来てくれるというのもいいかなと。誰かとしゃべったり、何気ない時間というのが一日のうちに少しでもあった方が良さだろうと思いますし。受け入れ態勢を作りながら、地域と連携していけたらいいなと思います。また、珊瑚舎スコーレでも講師をしているんですが、そこでもいろいろ勉強させてもらっています。結構ユニークな講師が集まっています。そこでの経験や繋がりを活かしながら活動していけたら良いなと考えています。

公民館を利用して便利な所

公民館がないと活動できないので、必要だと思っています。それ以外でも清掃活動だったり、地域のイベントで、普段はエイサーしかしていない子どもたちが掃除をしたり、花壇をきれいにしたり、地域のボランティアの方たちが鍋を作ってきてくれたりして交流できるというのが魅力ですね。同じ世代だけではなく、子どもからお年寄りまで世代を超えた交流ができるのがとても良いと思っています。

公民館を利用して改善してほしいところ。ここを良くしたらいいのにと思うところ。

＜地域交流の場として＞

小祿南公民館の利用団体の会長もして3年目なんですね。公民館でも利用団体同士の交流会やボーリング大会やゴルフなんかをするんですけど、それぞれの団体だけでの利用で終わってしまって、各団体のメンバーの顔も名前も知らないという状況が結構多いと思うんです。せっかく地域の人たちが集まれる場所なので、自分たちの活動の枠を超えた交流ができれば良いなと思っています。

＜公民館利用の課題＞

まわりでいろいろ活動されている人の中で、活動場所を探している方も多いんですが、公民館を活動場所として思いつく人が少ないんです。「公民館を借りたら」と提案したら「公民館って使えるの？」という反応が返って来るんですね。公民館が利用できるという感覚があまりないので、もっと周知していけたらなと思っています。小祿南公民館も空いている時間があるので、もったいないなと思っていて、ただ、難しいのは活動時間が重なるので、うまく空いている時間に入れるということができないのも現状なんです。新しいサークルや活動団体はできているんですが、定期で利用している団体が更新していくので、新規で入りにくいというのはあります。私たちも長く公民館を使わせてもらってはいるんですが、本当は他にも使いたいという人たちがいるんだろうなというのは考えていて、平等に利用できる方法を考えていかないといけないんですけどね。そうすると自分たちの練習する場所がなくなってしまうので、悩ましいところです。抽選にしたら良いのかなとも考えますが、酷ですよ。うまい具合に新規の方たちが利用できる方法を考えて行きたいです。これは課題だと思っています。

各公民館の空き情報なんかも、ネットで確認することができたらとても便利だと思います。近くの公民館であれば、言って直接聞くこともできるんですけど、どうしても時間がかかってしまうし、電話で確認するにしてもタイミングが悪いときは電話が繋がらないということもあるので。人が対応する温かみという良さもあるんですが、忙しい時や急いでいる時なんかはネット上で情報が確認できるとありがたいですけどね。私自身、公演などででんぶす館やパレット、ているとか、空き情報をネットで確認するんですけど、すごく便利なんですよ。

取材日：2016年1月20日 報告者：平良亜弥

考 察

本調査は、沖縄県公民館連絡協議会の協力を得て、各市町村教育委員会宛に公文と共に質問票をメールにて送付、各公立公民館に回答いただくようにした。その過程で、公立公民館だけではなく、類似施設にも質問票が配布されたところもあり、調査結果のなかには類似施設の回答が含まれていることをご了承いただきたい。

調査を進める過程で、質問票が公民館に未着のケースも複数あったほか、行政手続き上公立公民館として設置されているが、自治会が管理運営を行っているため公立公民館であるという自覚がなかった館などもあった。自治体によって公民館のあり方や運営体制が大きく異なることが明らかになると同時に、インターネット環境の未整備や常勤職員の不在等の理由で情報伝達手段に課題を感じる場面も多くあった。

調査結果をみると、関心事として最も高いのは人材育成で、つくりたいネットワークもまちづくり関係、こども関係、学校関係、学生など、これからの地域を担う《未来型》ネットワークであることがわかる。一方、「ユニーク」だと思ふ事業の実際の参加者をみると過半数が50歳以上であり、20歳から49歳までの参加者は全体の20%にも満たなかった。高齢者層の参加は充実しているが、もっと若い世代にも参加を期待しているものの実際は参加が少ないという現状が示されている。この傾向は公民館活動全般にいえるだろう。

事業における課題では、施設利用者の固定化が最も高いが、広報に関しては困っていないとの回答結果が出ている。《未来型》志向の担い手として期待される若年層や働き盛り世代の参加が少ないにもかかわらず広報に関する課題意識が低い理由として、参加者数は定員に達することも多く、事業として成功していると判断しているということが考えられる。

しかし、「沖縄県 生涯学習に関する県民意識調査報告書」（平成27年／沖縄県教育委員会）によると、過去一年間に趣味や学習活動で使った施設としては、公民館は20.0%で4位である。前回調査（平成20年）の18.5%と比べると1.5ポイント上昇しているが、前々回調査（平成15年）の31.1%からは10.1ポイントも下がっている。つまり10年単位で見ると利用者は大幅に減少していることがわかる。既存利用者にとって公民館は居場所になっており、担うべき機能を一定果たしていると捉えられるが、今後、若年層や働き盛り世代といった《あらたな利用者》の開拓ができなければ公民館自体の存在意義は薄れていくことになるだろう。

公民館をより開かれた生涯学習施設として機能させるには、このような現状を理解した上で、来て欲しい層と実際の参加者とのミスマッチについて自覚し、新規利用者を開拓するために周知広報の方法を見直すなど、アクセシビリティを高めるための工夫と努力が必要になってくる。

また、既存利用者の居場所としての機能を大切にしながらも新規利用者を受け入れるには、健康、環境、防災などくらしにまつわる《維持型》志向を支える高齢者層と人材育成やまちづくりといった《未来型》志向の担い手となる若年層をつなぐ何らかの仕掛けが必要となる。ユニークだと思ふ事業の内容を確認すると、人材育成に関する事業のなかに芸術文化、教育、科学技術などを日常のくらしや地域の環境に組み込むことで、《未来型》志向と《維持型》志向の両軸をつないでいる事例がみられた。複雑化する現代社会の課題に対応し、地域の《未来》を創造するには、クリエイティブな思考を育み、イノベーションをひきおこすことが必要となる。そのためには公民館の事業には《クリエイティブ＝イノベティブ型》の志向が求められる。

さらに、回答のなかで最も気になったのが、運営上の課題ならびに事業についての課題ともに全項目において「どちらともいえない」がきわめて多かったことである。公民館は「実際生活に即する教育、学術及び文化に関する各種の事業を行い、もつて住民の教養の向上、健康の増進、情操の純化を図り、生活文化の振興、社会福祉の増進に寄与することを目的」（社会教育法第22条）とした施設であるため、活動内容は幅広い。特定の分野に対して取り組む行政の他部署・機関とは大きく異なるが、設置者の自治体から各公民館のビジョンを示されることはなく、活動の方向性は職員に委ねられているところが大きい。そのため課題を明確化しづらい状況が生まれていると推測できる。しかし、課題の把握ができなければ解決への糸口を見つけることはできない。地域の状況に即応した中長期ビジョンを立てて公民館活動を充実・発展させるためにも地域課題や社会課題の把握とノウハウやネットワークの蓄積が不可欠となるが、組織や人員の面で十分な体制を整えられず、専門的知識をもった経験豊かな職員が不足している現状が浮かび上がってきた。

公民館の実態調査とあわせて行った利用者へのヒアリングでは、生きがいづくりや仲間づくりだけではなく、創意工夫を凝らしながら活動を継続することで様々な学びを得、それを地域や社会に還元するサークルの姿を確認することができた。那覇市小禄南公民館で活動する『創作エイサー団体那覇太鼓』の事例は、障がいを持つ子を受け入れたことをきっかけに社会の多様性を知り、ともに活動する中で互いに学び合うことにつながっている。サークルが《社会的包摂》を実現している好例だといえるだろう。

本調査を実施するなかで、現在公民館が果たしている役割や意義をあらためて確認できた。また同時に、様々な課題もみえてきた。今後さらに多様化、複雑化する地域社会において、公民館の役割はますます重要になってくる。職員の専門性とノウハウの蓄積といった課題はあるが、沖縄県内の各公民館がネットワークし、事業運営のノウハウやプログラムの共有ができれば、これらの課題改善につながり、公民館の本来的な機能を発揮できるようになるだろう。地域社会をより豊かなものにし、地域の未来を拓いていくためにも、公民館が果たすべき役割は大きく、公民館自身が創造的で魅力的な場になることが求められている。

特定非営利活動法人地域サポートわかさ理事／那覇市若狭公民館館長
宮城 潤

公民館の未来を拓く
地域の創造拠点になるために
「公民館を活用した芸術文化発信事業」調査報告書 2016

2016 年 2 月発行

発行・編集

特定非営利活動法人地域サポートわかさ
〒 900-0031 沖縄県那覇市若狭 2 丁目 12-1
TEL 098-917-3446
FAX 098-869-8624

編集委員

樋口貞幸、宮城潤、鳥越一枝、平良亜弥

調査協力

渡邊太（人間科学博士、大阪国際大学講師）
大澤寅雄（ニッセイ基礎研究所文化プロジェクト室准主任研究員）
樋口貞幸（特定非営利活動法人アート NPO リンク事務局長）

協力

仲田美加子（沖縄県文化協会会長、那覇市文化協会会長）
山田義二（沖縄県教育委員会生涯学習振興課・沖縄県公民館連絡協議会担当）
島袋元治（那覇市教育委員会 生涯学習課主幹）
村上英己（全国公民館連合会事務局次長）

平成 27 年度沖縄文化活性化・創造発信支援事業 支援：公益財団法人 沖縄県文化振興会
事業名：「公民館を活用した芸術文化発信事業」
デザイン：cuppa
印刷：プリントバック

本書の内容に関するご意見・ご感想は下記までお寄せください。
info@cs-wakasa.com